資料NO. 1

平成25年度いわて未来づくり機構活動方針（案）

Ⅰ　活動方針

１　平成25年度は、機構の第２フェーズ（概ねH24～H26）の中間年であり、復興を加速する年でもあることから、機構としての復興に関する取組をさらに充実させるとともに、成果と実績をあげることに重点を置いて取り組む。

２　機構の活動内容の周知を図り事業の実効性を高めるため、引き続き積極的な情報発信を行う。

Ⅱ　活動計画

１　機構及び各会員が取り組む県民運動（平成24年７月の共同宣言に基づいた取組）

(1)　震災復興に向けた活動の推進

県民総参加による復興への動きを推進し、復興を加速させていく。

①　復興支援ポータルサイト「**いわて三陸 復興のかけ橋**」を中心とした情報発信・マッチングの促進・連携体制の構築

②　経済同友会などと共に、人づくり・街づくり・産業づくりに取り組む「**東北未来創造イニシアティブ**」の推進

③　**復興教育**をテーマとした新部会の創設と実効性のある取組の推進

(2)　いわての復興の象徴であり希望あふれる未来の実現に向けた活動の推進

復興の象徴となる取組を後押しすることで、復興とその先の希望あふれる未来の実現を図る。

①　**国際リニアコライダー**（ＩＬＣ）の東北誘致に向けた県民意識の盛り上げ、国内候補地決定後の研究施設とその周辺環境の整備など、受入体制の充実

②　**2016 希望郷いわて国体**の開催に向けた県民意識の盛り上げ、募金活動・協賛活動への協力や関連イベント等への積極的な参加

③　**いわて三陸ジオパーク**認定に向けた県民意識の醸成、ジオパークに関する周知啓発や三陸復興国立公園の指定と連動した復興・地域おこしの取組

２　具体の課題解決のための各部会の活動

各作業部会は、いわての復興と未来づくりに向け、緊急かつ重要な課題に対応するための目に見える活動を行い、**具体の成果を出していくことを強く意識**して当該成果をラウンドテーブル、会員及び県民にフィードバックする。

部会名【担当機関】	平成 25 年度の主な活動計画・目標等
東北未来創造イニシアティブ作業部会 【岩手銀行】	・人材育成道場の開設及び円滑な運営
産業復興作業部会 【岩手大学】	・H24 策定のアクションプランの推進 ・沿岸地域の企業訪問を行い、支援内容に関し要望調査を実施 ・コーディネータの連携体制の構築
医療福祉体制作業部会 【岩手県立大学】	・研究会の開催(月１～２回) ・講演会・研修会の開催 ・仮設住宅及び復興公営住宅等の孤立死、自殺の防止に係る取組体制の構築
かけ橋作業部会 【岩手県】	・マッチングの促進 ・復興関連情報の発信 ・復興支援ネットワークの強化
観光作業部会 【岩手県商工会議所連合会】	・ILC 誘致の実現 ・花巻空港の台湾定期便就航の実現 ・「あまちゃん」を利用した観光の推進
（仮称）復興教育作業部会	・「いわての復興教育プログラム」の推進を支援

３　積極的な情報発信

機構の活動を積極的に発信することで、活動のより効果的な展開を図る。

①　会員団体の総会等を利用した団体構成員等に対する機構の取組内容の周知
②　機構だよりの充実（年４回の発行)、電子メール等を利用した会員向け情報提供（随時）の強化
③　機構ＨＰ（岩手のイイモノ紹介など概ね隔月更新）による、一般向けの情報発信の強化
④　会員、構成団体ＨＰとの相互リンク等による、露出の拡大

Ⅲ　スケジュール

主なスケジュール	概要（案）
〇第１回ラウンドテーブル 日時：6/24(月)14：30～15：30 会場：ホテルメトロポリタンＮＷ 司会：(岩大)岩渕副学長	・25 年度の活動方針についての協議 ・新部会(復興教育)の設置についての協議 ・東北未来創造イニシアティブの進捗状況報告
〇総会・交流会 日時：(総会)6/24(月)15：40～17：00 (交流会)　17：15～19：00 会場：ホテルメトロポリタンＮＷ	・24 年度実績報告、25 年度事業計画の審議 ・ILC 誘致に係る経過報告、機構としての決議 ・講演
〇第２回ラウンドテーブル 日時：10 月下旬 会場：岩手大学(仮) 司会：(県)中村部長	・具体の課題(国体・ＩＬＣ・ジオパーク・ものづくりビジョンなど)に対するディスカッション ・活動内容の確認、修整、追加等
〇第３回ラウンドテーブル 日時：１月下旬 会場：岩手銀行(仮) 司会：(岩銀)斎藤専務	・活動内容の確認、総括 ・次年度の活動に向けた提言

いわて未来づくり機構の推進体制について

設立の趣旨

・岩手県内で活動する組織の知恵と行動力を結集
・地域社会の総合的な発展に向けオール岩手で取組み
具体的に実践

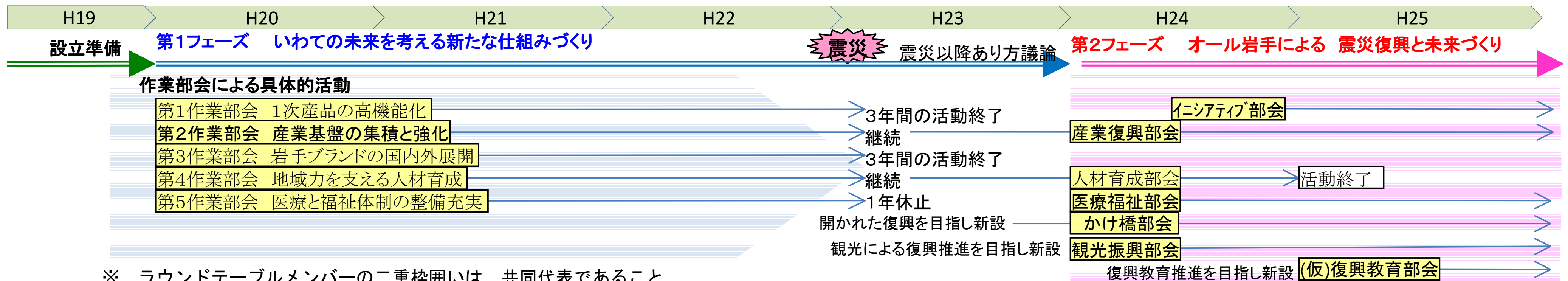
現状と課題

〇県内関係機関によるネットワーク構築（会員58団体）
〇部会活動を主体とした一定の成果
☆震災からの復興に向けた役割の変化
☆機構の位置付けや推進体制の見直し

目指す方向性

・機構の役割を再確認し、内外に発信（共同宣言など）
・各団体の動きを共有化し、オール岩手の取組を誘導
・各部会の方向性を明確にし、軸のブレない活動を実践

活動の経緯



推進体制	産			学		官
ラウンドテーブル	岩手経済同友会代表幹事 岩手銀行頭取　高橋真裕	岩手県商工会議所連合会 副会長　谷村邦久	大船渡商工会議所副会頭 米谷　春夫	岩手大学 学長　藤井克己	岩手県立大学 学長　中村慶久	岩手県 知事　達増拓也
企画委員会	専務取締役　斎藤雅博	専務理事　廣田淳		理事　岩渕明	副学長（地域連携担当） 柴田義孝	政策地域部長　中村一郎
事務局	執行役員総合企画部長 三浦茂樹	事務局次長 猿川毅		地域連携推進センター 副センター長　小野寺純治	地域連携室長 鈴木清也	政策推進室調整監 平野直
作業部会と主な成果	第1作業部会(活動終了) ・GAP導入セミナー(H21) ・農商工連携セミナー(H22)	観光作業部会 ・講演会開催(H24)		第4作業部会(活動終了) ・人材シンポ開催(H21) ・高校生支援ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ(H24)	医療福祉体制部会 ・地域会議の設立(H20) ・ﾊﾟｲﾛｯﾄｽﾀﾃﾞｨ実施(H24)	第3作業部会(活動終了) ・買うなら岩手のもの(H22) ・黄金の國フェア参加(H22)
	東北未来創造ｲﾆｼｱﾃｨﾌﾞ 作業部会 ・H24開始			産業復興部会 ・企業説明見学会(H20～) ・部会員の活動HP掲載(H24)		かけ橋部会 ・かけ橋PJ(H23～) ・ｸｰﾙｼﾞｬﾊﾟﾝ海外展開(H24)
				復興教育部会 ・H25開始		

資料 NO. 2

平成 25 年度　いわて未来づくり機構
第１回ラウンドテーブル　資料

部会実績報告及び活動計画（案）

いわて未来づくり機構　東北未来創造イニシアティブ作業部会の実績報告・活動計画（25.6.24）

テーマ： 東北未来創造イニシアティブの運営

座長： 稲垣　秀悦　　　　担当機関：㈱岩手銀行

【報告要旨】

○　東北未来創造イニシアティブ作業部会は、本県における東北未来創造イニシアティブの活動のコア事業である**「人づくり」「街づくり」「産業づくり」による被災地復興に向けた支援事業**を東京リエゾン・オフィスと連携しながら進める方針である。

○　今年度の目標は、**実践行動型人材育成道場**として、次代を担う地域事業家の底上げを図るべく**「経営未来塾」**、地域のロールモデルになり得る経営者を対象とした**「エグゼクティブ・コーチング」**、**「自立・起業塾」**の開設と運営、および釜石・大船渡地区の**震災復興計画の具現化**を、作業部会メンバーの人脈、情報を駆使し経済同友会からの出向者と協働して推進すること。

○　出すべき成果は、実践行動型人材育成道場「経営未来塾」において情熱と志、構想力、行動力を持つ地域のリーダーを育成するとともに、「自立・起業塾」を開設し起業家を育成することにより地域経済の活性化を図ること。

1．活動（開催）実績等（前回 25.2.9ＲＴ以降の活動実績）

平成 25 年 4 月　　　　　事務局を㈱岩手銀行に置き、体制作りに着手

作業部会立上げ準備

平成 25 年 6 月 13 日（木）25 年度第 1 回部会開催

2．活動（検討）内容（主な活動・議論）

○　事務局を㈱岩手銀行（地域サポート部）とし、東北未来創造イニシアティブの本県における本格展開のための態勢づくりに着手。

○　専担者（㈱岩手銀行地域サポート部所属）を釜石市に配置し、東京リエゾン・オフィスや自治体等の関係機関と連携し、実践行動型人材育成道場「経営未来塾」の立上げに向けた活動を開始。

○　平成 25 年 4 月にパイロット実施された気仙沼市の事例を参考として、本県における実践行動型人材育成道場「経営未来塾」の運営に向けた課題等について検討を行った。

○　釜石市、大船渡市、大槌町、陸前高田市等の地域関係機関と実践行動型人材育成道場「経営未来塾」の開設に向け打合せ実施。

○　6 月 13 日に第 1 回作業部会を開催し、メンバーの紹介、作業部会の事業内容、東北未来創造イニシアティブの活動を再確認。実践行動型人材育成道場「経営未来塾」の運営に係る今後のスケジュール確認と経済同友会出向者からの作業部会への協力要請内容の周知。

３．平成 25 年度の活動計画

（１）今年度の目標・出すべき成果

・実践行動型人材育成道場「経営未来塾」の開設および運営
・公開フォーラム開催準備
・「エクゼクティブ・コーチング」の開催
・「自立・起業塾」の開設
・震災復興計画の具現化

（２）活動計画

・平成 25 年 7 月上旬　「経営未来塾」塾生公募開始
・平成 25 年 8 月 25 日　「経営未来塾」開塾
・平成 25 年下期　公開フォーラム開催
・平成 25 年下期　「エグゼクティブ・コーチング」開催
・平成 25 年下期　「自立・起業塾」開塾
・平成 26 年 2 月　「経営未来塾」卒塾式

（３）震災復興計画の具現化については、釜石市、大船渡市と協議し具体的なスケジュールを確定していく。

いわて未来づくり機構 産業復興作業部会の
実績報告・活動計画（25.6.24）

テーマ：産業基盤の集積と強化について

座長：井山俊郎　　　　　担当機関：岩手大学

【報告要旨】

●平成２５年度第１回部会要旨

平成２４年度の活動実績及び平成２５年の活動計画、並びに活動に関する問題点と今後の対応について意見交換した。

出席者から出された主な問題点等

・地域によっては、有効求人倍率が１倍を超えているものの、がれき処理などの事業の単価が高いため、社員を募集しても集まらない。また、市外から来てもらうにも宿舎がない。
・グループ補助金（3/4 補助）が決まっても、経営状態の悪い企業は金融機関から融資を受けられず、自己資金（1/4）を用意できず倒産するケースがある。
・補助金を受けて開業しても被災前と同じ事をしている（＋αがない）。
・各組織に所属するコーディネーターがバラバラに動いており、企業訪問が重複し業務の支障となっているケースがある。コーディネーター問題は全体をコントロールする組織が必要。早急に体制を構築する必要がある。
・被災地では、技術開発や製品開発するためのビジョンを描けず被災前と同じ事をしているものづくり企業が多いという現状があり、今後、被災地のものづくり企業が将来に希望を抱けるようなビジョンの方向性などを、ＲＴメンバーに議論してもらえれば、被災地の企業にとっても人々にとっても励みになるのではないか。

●今年度、産業復興作業部会として目指すべき目標、出すべき成果

【目指すべき目標】

①アクションプランの推進

沿岸被災地域のものづくり産業の復旧・復興支援のため、 ものづくり産業支援に係るアクションプランを推進する。

※〔７つのアクションプラン〕

a）沿岸各地域におけるものづくり企業の被災状況、市町村とものづくり支援センターによる支援内容、今後の支援に対する要望に関する調査
b）各組織が行う復旧・復興支援内容の HP 公開
c）復興事業・状況などに関する情報交換の場の設定支援
d）補助金申請支援
e）各地域の市町村や各地域のものづくり産業支援センターなどの活動支援
f）人材育成支援

g)技術開発支援

②アクションプラン実施に関する情報交換

各組織が行うアクションプランに関する実施情報の交換を通じて、支援活動における問題点とそれらの解決策を審議する。

③コーディネーターの連携体制の構築

被災地域の産業復旧・復興支援に重要な役割を果たしている各組織所属のコーディネーターの個別活動の問題(重複訪問など)を解決するため、コーディネーターの連携体制を構築する。

【出すべき成果】

①アクションプランの推進

- 沿岸被災地域のものづくり産業における人材の高度化、技術レベルの向上が期待できる。
- アクションプランに対する各組織の実施内容がホームページで一覧可能となり、被災企業による容易な支援情報取得が期待できる。
- 各組織の将来の活動や計画に対し、沿岸被災地域の新たな要望の反映が期待できる。

②アクションプラン実施に関する情報交換

各組織の将来の活動や計画に対し、支援活動における問題点解決策の反映が期待できる。

③コーディネーターの連携体制の構築

コーディネーターの連携体制の構築により、各コーディネーターの所有情報の共有化、事案に対する適切な支援活動が可能となり、効率的な支援活動が期待できる。

１．活動(開催)実績等(前回 25.2.9ＲＴ以降の活動実績)

平成 25 年 5 月 7 日　　平成 25 年度第１回部会開催

２．活動(検討)内容(主な活動・議論)

平成２５年度第１回

(1)平成２４年度の活動実績及び平成２５年の活動計画について

各組織における平成２４年度に実施した復興支援活動及び平成２５年度に実施予定の活動計画について意見交換し、以下のような問題点が出された。

これまでの活動において浮上した主な問題点

- 地域によっては、有効求人倍率が１倍を超えているものの、がれき処理などの事業の単価が高いため、社員を募集しても集まらない。また、市外から来てもらうにも宿舎がない。
- グループ補助金(3/4 補助)が決まっても、経営状態の悪い企業は金融機関から融資を受けられず、自己資金(1/4)を用意できず倒産するケースがある。

・補助金を受けて開業しても被災前と同じ事をしている（＋αがない）。
・各組織に所属するコーディネーターがバラバラに動いており、企業訪問が重複し業務の支障となっているケースがある。

(2)活動に関する問題点と今後の対応について
・被災地では、将来のビジョンを描けず被災前と同じ事をしているものづくり企業が多いという現状から、今後、被災地のものづくり企業が、例えば、技術開発や製品開発する場合の目指すべき方向に関して、将来に希望を抱けるようなものづくり産業のビジョンをＲＴメンバーから提言してもらえれば、被災地の企業にとっても人々にとっても励みになるのではないか。
・コーディネーター問題は全体をコントロールする組織が必要。早急に体制を構築する必要がある。

３．平成25年度の活動計画

(1)今年度の目標・出すべき成果
・アクションプランの推進。
・アクションプラン実施に関する情報交換。
・コーディネーターの連携体制の構築。
・沿岸被災地域のものづくり産業における人材の高度化、技術レベルの向上。
・被災企業による容易な支援情報取得。
・支援活動における問題点解決策の反映。
・コーディネーターの所有情報の共有化、事案に対する適切な支援活動。

(2)活動計画
・作業部会のアクションプランを引き続き推進する。
・ものづくり産業の支援活動で明らかになった問題点について解決策を審議する。
・沿岸地域の被災企業を訪問し、支援内容に関し要望調査を行う。

いわて未来づくり機構　医療福祉体制作業部会の
実績報告・活動計画（25.6.24）

テーマ：医療と福祉体制の整備
―見守りを核とした被災地の生活支援型コミュニティづくり―

座長：　小川晃子　　　　　担当機関：岩手県立大学

【報告要旨】

釜石市鵜住居等でモデルを構築してきた「ICTを活用した医療・福祉の連携による見守り」について、その社会技術の有効性を取りまとめるとともに、岩手県（政策地域部、保健福祉部、県土整備部、復興局等）及び沿岸市町村と協働して、仮設住宅及び災害復興公営住宅等の住民の孤立死・自殺を防ぎ、コミュニティを再構築するための実践的取り組み体制の構築を目標として進める。

プロジェクトは、岩手県立大学と日本遠隔医療学会・岩手医科大学の研究者が連携して取り組む。

１．活動（開催）実績等（前回25.2.9ＲＴ以降の活動実績）

(1) 研究会

2月19日・3月19日・4月18日・5月9日・5月12日　日本遠隔医療学会、岩手医科大学関係者との研究会

(2) 釜石市鵜住居におけるフィールドワーク

4月12日　サポートセンターにて生活支援連絡員との情報共有システム打ち合わせ

(3) 安否確認情報の共有化に関する打ち合わせ

2月21日・3月8日・3月22日・4月4日・4月26日・5月11日・5月21日・5月28日
釜石市仮設団地支援連絡員とサポートセンターの情報共有システムに関する㈱ＮＴＴドコモ復興支援チームとの検討会

2月14日　㈱ピープルとの交流促進システム開発検討

(4) 講演・研修会等

2月16日　日本遠隔医療学会スプリングカンファレンス　研究発表
「仮説住宅におけるICTを活用した見守りとコミュニティづくりの効果―釜石市鵜住居における復興支援事例から」小川晃子（岩手県立大学）、鎌田博之（盛岡赤十字病院）、長谷川高志（群馬大学）

3月28日　岩手県立大学公開講座盛岡地区講座「震災復興支援ICTを活用した医療・福祉連携」

5月21日　岩手県議会環境福祉委員会調査での講話「被災地におけるICTを活用した医療・福祉連携―見守りとコミュニティ再構築」

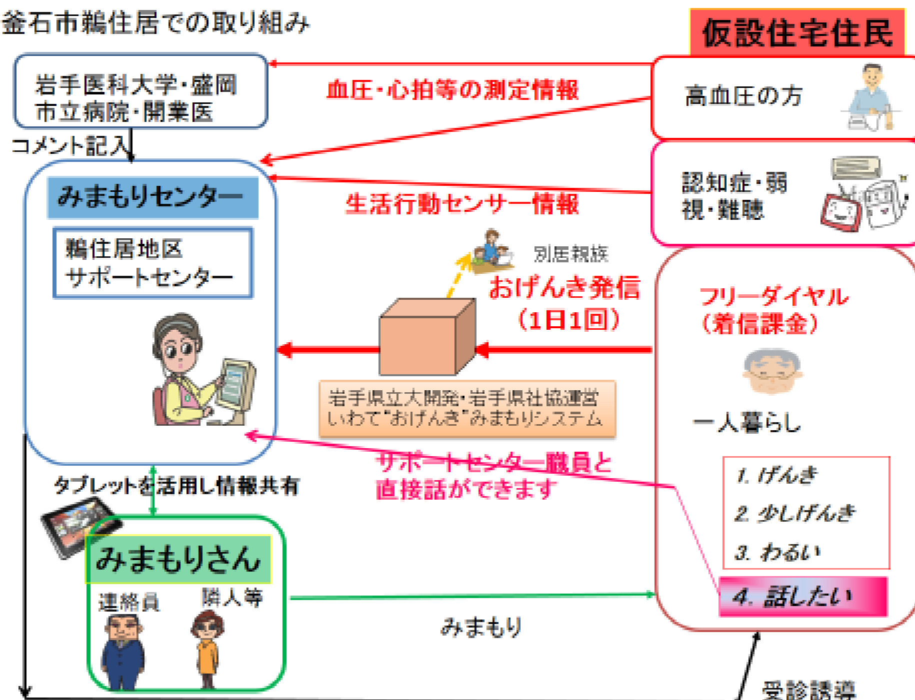
６月７日　いわてICTフェア2013セミナー「被災地におけるICTを活用した医療・福祉連携―見守りとコミュニティ再構築」

(5) 記事掲載

6月6日　DOGITAL GOVERNMENT（NTTDTA）「 高齢者の『みまもり』にICTをどう活用するか」

２．活動（検討）内容（主な活動・議論）

釜石市鵜住居等のフィールドで、仮設住宅団地におけるサポートセンターを見守りセンターとし、ICT（情報通信技術）を活用した複数のシステムを住民の特性にあわせて使い分け、安否情報を一元的に運用することで異変に確実に気づくとともに、生活支援を行うためのつながりが形成されることを明らかにした。



ICT を活用した見守りとしては、家庭用の電話機を利用し安価で普及できる「おげんき発信」を基盤として、難聴や認知レベルが低下した方には「電気使用によるセンサー」を、健康不安がある方には岩手医科大学が導入している「血圧測定伝送システム」を、使い分けた。

医療的見守りと福祉的見守りを連携することで受診が誘導されることが明らかになった。また、「おげんき発信」の「４．話したい」ボタンを活用して買い物を発注するなど、生活支援策との連携が可能である。

このフィールドワークをもとに、医療・福祉の研究者で議論してきたことは、次の点である。

① 見守りセンター機能の整備
② ICT を活用した異変把握方法の使い分けと一元化について
③ 見守りからコミュニティづくりへの仕組みづくり
④ 見守りにおける医療・福祉の連携策
⑤ 見守り側の情報共有方策
⑥ 生活支援型サービスの開発と連携
⑦ 政策提言内容の検討
⑧ 普及方策の検討

３．平成 25 年度の活動計画

(1) 今年度の目標・出すべき成果

① フィールドで検証した医療・福祉連携による見守りを核とした生活支援型コミュニティづく

りの有効性をまとめる
② 岩手県（政策地域部、保健福祉部、県土整備部、復興局等）に政策提言をする
③ 岩手県及び沿岸市町村と岩手県立大学が協働しこの社会技術を普及するための体制を提言
④ 仮設住宅及び災害復興公営住宅等の住民の孤立死・自殺を防ぐことにまずは焦点をあてた実践的取り組み体制の構築する

(2) 活動計画

① 研究会の開催（月１・２回）
② 岩手県関係部署への説明・打ち合わせ（５～６月）
③ 沿岸市町村への説明・打ち合わせ（６～７月）
④ 岩手県立大学地域政策研究センターにおける地域協働型研究プロジェクト等の外部資金の獲得と研究体制の構築（８～３月）
⑤ 講演会・研修会の開催（秋以降）

いわて未来づくり機構　かけ橋作業部会
の実績報告・活動計画（25.6.24）

テーマ：　いわて三陸 復興のかけ橋プロジェクトの推進

座長：　平野　直　　　　　担当機関：岩手県

【報告要旨】

平成25年度はプロジェクトの実施体制を強化し、ボランティア・支援団体等の減少に伴う復興支援体制の変化や震災復興に対する関心の低下などの社会環境等の変化を踏まえながら、次の取組みを進める。

① 復興支援のマッチング（地元の支援ニーズや県内外からの支援提案の把握とマッチングの促進）

② 復興関連情報の発信（県内外からの支援実績や復興の進捗状況、支援団体等の活動状況等）

③ 復興支援ネットワークの強化（県内外の団体や企業との連携体制の構築や団体間のコーディネート等）

また、事業の実施には機構会員の協力が不可欠であり、次の取組みを積極的にしていただきたいこと。

・復興支援のマッチングに関する情報提供

・会員が行う復興支援事業や復興関連イベント、マッチング実績等の情報発信

１．活動（開催）実績等（前回25.2.9ＲＴ以降の活動実績）

平成25年度体制スタート： 平成25年4月1日	・作業部会事務局を岩手県立大学から岩手県（政策地域部）に移管。サテライト設置及びコーディネーター配置等を公益社団法人助けあいジャパンに委託。
サテライト開設：	
平成25年4月17日	・陸前高田サテライト
平成25年4月26日	・釜石サテライト
平成25年4月27日	・盛岡事務所
平成25年5月1日	・久慈サテライト、宮古サテライト
平成25年度第1回作業部会 平成25年5月29日	・プロジェクトの取り組み内容について ・作業部会の役割について
（通年実施）	・被災地の復興支援ニーズと県内外の支援者とをマッチングする「いわて三陸　復興のかけ橋プロジェクト」を実施

２．検討内容（主な議論）

(1)　平成24年度の活動実績

平成23年度の取り組みを継続することを基本として、次の取り組みを行うことで「いわて

三陸復興のかけ橋プロジェクト」の輪をさらに広げていくことを目指して活動を行った。

① ネットワークを強化し、支援ニーズの掘り起こしと、より上流工程での支援を目指す。
② 人材育成につながるワークショップを沿岸部の団体等と連携して開催する）
③ 復興に向けた地域づくりの動きを横展開できるように支援する

(2) いわて三陸復興のかけ橋プロジェクト

平成24年度のマッチング実績等は以下のとおり。

マッチング実績（平成23年12月～）　　　　（平成25年5月30日現在）

提案件数	提案件数	マッチング件数	受入先等
企画提案型	11	3	11
ニーズ型（要請）	75	38	54
ニーズ型（支援提案）	70	42	77
その他	2	－	－
計	158	83	142

※ 受入件数 マッチングした案件には複数の受入となる場合があり、その受入先を集計したもの。

(3) 平成25年度第1回作業部会

【議題】

・平成25年度のかけ橋プロジェクトの取組みについて
　体制強化が図られたかけ橋プロジェクトの取組みについて意見交換
・作業部会の役割について
　平成24年度までの取組みを踏まえ、平成25年度はさらにプロジェクトの実行に重点を置いた取組みを進めることとしており、作業部会の役割も大きく変わることから、作業部会のあり方や役割について意見交換

(4) 実施体制の強化

作業部会事務局を岩手県立大学から岩手県（政策地域部）に移管して県庁各部局との連携を強化するとともに、サテライト設置及びコーディネーター配置等を公益社団法人助けあいジャパンに委託。

名　称	人数	場　所
陸前高田サテライト	3人	陸前高田市高田町字大隅93-1 （一般社団法人 SAVE TAKATA 事務室内）
釜石サテライト	2人	釜石市平田第3地割75-1 （岩手大学三陸復興推進機構釜石サテライト内）
宮古サテライト	2人	岩手県宮古市五月町1丁目20 （岩手県宮古地区合同庁舎内）
久慈サテライト	1人	岩手県久慈市八日町1丁目1 （岩手県久慈地区合同庁舎内）
盛岡事務所	3人	盛岡市本宮５丁目10しぇあハート村115棟C

３．平成 25 年度の活動計画・方向性

(1)　今年度の目標・出すべき成果

ボランティア・支援団体等の減少に伴う復興支援体制の変化や震災復興に対する関心の低下､支援意思のある企業等に対するアプローチ不足などの社会環境等の変化を踏まえながら、次の取組みを進める。

①　復興支援のマッチング（地元の支援ニーズや県内外からの支援提案の把握とマッチングの促進）

②　復興関連情報の発信（県内外からの支援実績や復興の進捗状況、支援団体等の活動状況等）

③　復興支援ネットワークの強化（県内外の団体や企業との連携体制の構築や団体間のコーディネート等）

(2)　会員への協力依頼事項

①　復興支援のマッチングに関する情報提供

→　会員に寄せられた復興支援の要望や要請等（ニーズ）のうち、会員での対応が難しい案件

→　会員に寄せられた支援提案のうち、会員での対応が難しい案件

②　会員が行う復興関連イベント、会員が関与した復興支援マッチング実績等についての情報提供

③　本事業で配置しているサテライトのコーディネーターへの取材等への対応

④　会員が行う復興支援事業等の本ポータルサイトへの掲載

⑤　会員ホームページでの本事業の紹介やリンクの設定

なお、企画委員会構成会員及び復興支援を事業として実施している会員については、復興支援ポータルサイト「いわて三陸　復興のかけ橋」を活用した積極的な情報発信をお願いする。

いわて未来づくり機構　**観光作業部会**
の活動報告・活動計画（25.6.24）

テーマ：岩手県の観光の推進について
座長：廣　田　　　淳　担当機関　岩手県商工会議所連合会

【報告要旨】

平成 24 年度は、岩手県の観光を推進するうえでの課題として 6 つの項目を検討した。

① コンベンション誘致活動と復興支援
② ポスト DC を見据えた観光振興
③ 観光マネージメント力の強化による地域資源の発掘と育成
④ 情報発信力の強化
⑤ 県北観光の振興
⑥ 国際観光の推進
（1）国際リニアコライダー計画等の誘致活動
（2）花巻空港の国際便就航

平成 25 年度は各団体が積極的に連携を取りながら、24 年度に引き続き、次の 4 項目に取り組んでいる。

① 国際リニアコライダー計画（ＩＬＣ）の誘致活動
4 月 10 日～15 日にジュネーブ：ＣＥＲＮを視察。上野副知事をはじめ総勢 35 名が参加し、東北のアピールや国際学術研究都市形成に向けた受け入れ体制の整備について調査・研究を実施した。また、幕張インターナショナルスクールの視察や岩手県、東北 ILC 推進協議会と連携し、多くの講演会や決起大会、要望活動に取り組んだ。研究者の立地評価会議において、本年 7 月末頃までに国内候補地を一本化するとのことであり、全力で誘致に取り組む。

② コンベンション活動
5 月 23 日～24 日に岩手経済同友会が「全国経済同友会セミナー」を開催。岩手県商工会議所連合会は、7 月 4 日～6 日に「全国商工会議所観光振興大会いわて大会 2013」～復興を推進する交流観光～をテーマとして開催するべく準備を進めている。

③ 花巻空港の国際便就航
4 月 21 日～25 日に実施された台湾への達増岩手県知事のトップセールスに商工会議所役員も民間の立場から参加し、台北との定期便就航の実現に取り組んだ。今後も、実現に向けた活動に積極的に参加する。

④ 県北観光の推進
“あまちゃん”を最大のチャンスと捉え、継続的な観光の推進に取り組む。

1.開催実績等

平成 25 年 2 月 9 日　ラウンドテーブル以降の部会開催はなし。

２．検討内容（主な議論）

なし。

３．平成 25 年度の活動計画

（1）今年度の目標・出すべき成果

①ＩＬＣ計画の誘致

研究者からは､本年 7 月末頃までに国内候補地を一本化するとのことであり、岩手県、東北 ILC 推進協議会と連携して、全力で取り組む。

②コンベンション活動においては、予定されている大規模コンベンションにおいて、再び、岩手を訪れてもらえるよう工夫を凝らして開催する。

③花巻空港の国際便就航は、台湾との定期便就航実現に向けて取り組む。

④県北観光の推進については、“あまちゃん”を最大のチャンスと捉え、みやげ品開発等継続的な観光の推進に取り組む。

（2）活動計画

①ＩＬＣ計画の誘致

英語版リーフレット、ＤＶＤを制作し、動画ウェブを活用して、世界への情報発信に取り組む。6 月 29 日には、公開講演会（県民集会）を開催するほか、高等学校での講演会や児童生徒を対象として「ILC 特別授業」を 6 月下旬から 7 月上旬に開催する。

②コンベンション活動

二つの大規模コンベンションの開催状況を検証して、新たなコンベンション誘致のあり方などを意見交換する。

③花巻空港の国際便就航

4 月 21 日～25 日に実施された台湾への達増岩手県知事のトップセールスに商工会議所も民間の立場から参加し、台北との定期便就航の実現に取り組んだ。今後も、実現に向けた活動に積極的に参加する。

④ 県北観光の推進

ＮＨＫ朝の連続ＴＶ小説“あまちゃん”は、大変な人気を博しており、これをチャンスと捉え、市内中心部商店街との連携、みやげ品の開発などに取り組んでいることから、県北への復興バスツアーなど積極的に支援する。

平成 25 年度の作業部会は、各団体が積極的に連携を取りながら、行動を展開する。全国商工会議所観光振興大会開催後に、年２回程度の部会を開催し、取り組み状況等を確認する。

いわて未来づくり機構　作業部会報告書

地域力を支える人材育成

平成 25 年 3 月

「地域力を支える人材育成」作業部会（第４作業部会）

目　　　　次

1　目的・方針

本作業部会の活動の目的、方針を決めるにあたり、以下の前提を作業部会メンバー間で共通認識を持った。

・本作業部会は「安全・安心して暮らせる岩手を築くために、課題を整理し、長期スパンで検討」し、実践するための組織であり、審議機関ではない。
・人材育成は未来づくり機構（以下「機構」という。）所属機関等において既に行われているところではあるが、広く見直すことで、共通の課題を見出す。
・作業部会あるいは機構の枠組みの中で組織が結びつくことで、新たな人材育成の取り組みが期待される。
・人材育成は、短期的にその成果が発生するものではなく、長期的な視点に立って行っていく性格のものである。
・「地域力を支える人材」について、本作業部会では、単に「地域を支える人」という理解とする。
・地域力を支える人材育成を、現場（企業等）でどう理解し、行われているか、その実体をアンケート調査によって把握する。

そこで、本作業部会では、平成２０年度に機構所属機関にアンケート調査の実施と結果の分析を行った。調査項目、対象及び結果等は以下のとおりである。

項　　目：①会社、機関、団体等の概要について
②従業員（職員）に採用について
③人材育成について
④地域への貢献について
⑤「岩手県人らしさ」等について

調査対象：機構会員

調査方法：①調査年月日　平成２２年２月
②配布数：100社（県下全域、各業種）
③回収数38社（回収率38%）

結果概要

①採用での学歴は、「学歴関係なし」と「大学卒以上」がほぼ同率で40%程度であり、就職希望者に日常業務で必要な資質・能力は、「コミュニケーション能力45%と一般知識・常識40%」である。

②就職希望者に期待する性格は、「積極性50%」「責任感45%」「協調性42%」であった。

③人材の確保では「非常に満足（5%）」、「ある程度満足(58%)」であり、「確保できていない」が37%である。なお、確保できていなくても「問題が起きていない」が11%、「採用後に人材育成をしている」が５%あり、「問題が生じている」は11%である。

④従業員の能力開発・人材育成は、55%が「積極的に」行い、「普通に行っている」と

するもの42%を加えると97%に達する。

⑤知識、技能向上対策の主なものは「内部で上司が日常業務で指導」79%、「外部の研修会や視察研修に参加」74%、「資格を取得した者に手当を支給」53%である。

⑥職務能力向上対策としては、「配置転換」47%、「プロジェクトへの参加」32%、「抜擢」32%である。

⑦地域のイベントや地域づくりへの参加は、「人材と資金の提供」、「知識や情報、ノウハウ等の提供」といった方法でそれぞれ3割強が参加し、地域発展のための社会貢献については、「知識や情報、ノウハウ等の提供」が40%で最も多く、次いで「地域の仕事の受託」26%である。

⑧地域力向上対策としては、「地域生活や地域経済に貢献」、「自ら経済・収益力の向上」、「地域づくりを協働して行う」、「連携して経済･収益力の向上」を４～５割があげている。

⑨地域力向上での必要な分野としては、「農林漁業」が84%で極めて多く、次いで「飲食店・宿泊業」42%、「製鉄・非金・金属」40%、「電気情報・精密機械」40%である。

⑩採用では岩手県出身者を40%が「重視する」、55%は「関係無し」であるが、岩手県人らしさとはあまり関係がみられない。

課　　題：概要は把握できたものの、調査数が少なく、詳細な分析は不可能である。

アンケート結果を踏まえ、平成２１年度からは以下の方針で活動を行うこととした。

・活動方針を明確化するため、中・長期的な取組に加え、短期的な取組を行うこととする。
・中・長期的な取組として、県内の地域力向上のための人材育成プログラムを調査し、情報を公開してプログラム間のネットワーク化を図る。
・短期的な取組として、プレアンケートで地域力を高める上で期待度の高かった農林水産分野を重点的にフォローする。

しかし、東日本大震災により、機構の活動方針が「震災からの復興」に切り替わったことを受け、本作業部会でも平成２４年度からは上記方針に加え、「復興に向けた人材育成」に向けた活動を行った。具体的には、これまでの活動に「震災復興」の視点を加えて活動を継続すると共に、機構会員やいわて高等教育コンソーシアムと連携した復興に向けた人材育成に取り組むこととした。

２　検討内容と実践

ここでは、本作業部会が活動を行った平成２０年度から平成２４年度の間でどのような検討をしたのか、また、検討結果に基づき実施した事業等について、以下のとおり報告する。

（１）人材育成データベース

平成２０年度に行った人材育成に関するアンケートを踏まえ、平成２１年度には各組織が行う人材育成プログラムに関するアンケート調査の実施及び回答で得られた人材育成プログラムのデータベース化について検討した。この人材育成プログラムのデータベース化は、本作業部会の中・長期的活動と位置付け、人材育成データベースを構築し、インターネット上に公開した（別紙１）。

また、アンケート結果の報告と「地域力を支える人材育成」について広く市民とともに考えるために、平成２２年３月にシンポジウムを開催した（別紙２）。シンポジウムではＤＡＢアグリ研究所所長・岩手大学名誉教授の木村伸男氏による基調講演、本作業部会座長の後藤より人材育成アンケート結果の報告と人材育成データベースの説明、また、「地域力を支える人材育成とは」と題して、紫波町経営支援部企画課共同支援室主事の高橋哲也氏、一関工業高等専門学校教授の明石尚之氏、和同産業株式会社執行役員環境事業部部長の林俊春氏、株式会社惣兵衛代表取締役の畠山さゆり氏をむかえてのパネルディスカッションを行い、自治体、企業、ＮＰＯから約１００名が参加した。

平成２２年度には、データベースの機能強化を図るため、８月に以下の機能を追加した。

- 「医療」分野を「医療・福祉」分野に変更
- 「起業・経営」分野、「教育・学術」分野、「教養・文化」分野を追加
- 開催月、開催場所による検索を追加
- 新着情報・トピックス欄にファイル添付機能を追加

また、このシステム更新に合わせて、未来づくり機構会員、県内自治体、ＪＡ、森林組合、ＮＰＯ法人等に人材育成プログラムの実施状況等の調査を行い、その結果を基に人材育成データベースシステムへの新規データの登録を行った。

平成２２年１２月の本データベースに登録済みの人材育成プログラム数（内部研修を含む）は平成２１年度分が３９２件、平成２２年度分が５６２件の計９５４件であった。

平成２３年度にはアンケート調査を７月に実施し（対象：機構会員、県内の地方自治体・商工会議所・農協・漁協・森林組合・ＮＰＯ団体、計４８０機関・団体）、１０月には過去にご回答いただいた機関に対し、ＩＤ等を付与し、各機関で本データベースに、直接、研修等の情報を登録できるようにデータベースの更新を行った。その結果、平成２４年２月時点で、今年度実施の外部向け研修等が２４７件、内部向け研修等が１１９件、計３６６件の人材育成プログラムが登録された。

また、データベースに震災復興に関係した人材育成プログラムを、通常の分類とは別に検索できる機能を追加し、震災復興関連プログラムとして外部向け１２件、内部向け２件が登録された。

平成２４年度は７月に関係機関の協力を得て、プログラム情報の更新を行い、２８０件

（平成２５年１月現在、うち内部研修５１件）のプログラムが登録され、うち９件が震災復興関連プログラムであった。平成２４年１月から１２月のデータベース訪問者数は１，０４１（うち国内は１，０２５）で、その７割は新規訪問者となっており、震災を契機に本データベースの活用が進んだものと考えている。

（２）地方自治体と共同での人材育成プログラムの実施

平成２０年度に県内企業１００社に行った人材育成に関するアンケートにおいて、農林漁業が地域力向上に必要な分野という結果が出たことから、久慈市、八幡平市における人材育成プログラムの実施を計画した。

久慈市では、市の担当者等との協議の結果、ミドルリーダー育成を目的に、市内企業の中堅職員が情報交換等をする場を提供する「Ｋｕｊｉ　Ｃａｆｅ」を実施することとなり、先行事例の紹介として、盛岡市、岩手大学地域連携推進センターの協力により「インテレクチャルカフェとは？－ＭＩＵ　Ｃａｆｅに学ぶ異分野交流－」と題して、普段、盛岡市産学官連携研究センター（コラボＭＩＵ）で行われている「ＭＩＵ　Ｃａｆｅ」を平成２２年６月２８日にアイーナで実施した（別紙３）。地方自治体や本機構から４０名ほどが参加し、海外や日本国内のインテレクチャルカフェの取り組みやＭＩＵ　Ｃａｆｅ運営に関するノウハウ等を学んだ。その後、平成２３年３月にＴＰＰやＦＴＡをテーマにＫｕｊｉ　Ｃａｆｅを開催する予定であったが、震災のため中止となった。

平成２３年度は東日本大震災のため中止となった、Ｋｕｊｉ　Ｃａｆｅを、平成２３年１１月２８日に久慈グランドホテルで実施した（別紙４）。約３０名が参加し、「再生可能エネルギーに着目した久慈地域の未利用資源の可能性」をテーマに、岩手大学名誉教授の馬場守先生、岩手大学農学部助教の伊藤幸男先生に話題提供いただき、参加者と意見交換を行った。馬場先生には太陽光発電に関する技術的な進化の過程や今後の見通しについて、伊藤先生には、木質バイオマスエネルギーに関する現状、県内での活用事例、また、木質バイオマス利用が地域経済に与える効果等について話題提供いただいた。また、意見交換では、地元林業関係者より一般家庭等でのペレットストーブ普及についての組織的な取り組みが必要との意見があった。

第２回は平成２４年３月２１日にやませ土風館において、外からの視点を取り入れた地域活性化をテーマに、岩手大学学生をゲストスピーカーに招き、開催した（別紙５）。約３０名が参加し、久慈市での生活の質の向上に着目した住民主体の町づくり、若年層への観光のアプローチ、地域循環型の持続的な農業システム構築などの調査研究結果の報告の後、参加者による意見交換を行った。地域内での消費を念頭に置いた農業経営が持続的な農業に繋がる可能性があるので、農家と消費者を繋ぐコーディネーターを置く必要があるとの意見があった。

平成２４年度は７月５日に久慈グランドホテルにおいて開催した（別紙６）。後述する「地域リーダー」像提言の活用を兼ねて、「地域リーダー像を考える」というテーマで、本作業部会から、話題提供者として座長の後藤尚人（岩手大学人文社会科学部教授）、作業部会メンバーの村田憲正（岩手経済同友会・株式会社エフエム岩手代表取締役社長）、

山口明（岩手ネットワークシステム事務局・岩手大学工学部准教授）が参加した。約２０名の市民が参加し、座長及び作業部会メンバーによる話題提供の後、意見交換を行った。参加者から、地域の実状を交えながら担い手育成が大きな課題となっていることなどの意見が出され、地域リーダーの必要性と担い手育成の重要性を再認識する良い機会となった。

八幡平市では、市担当者等との協議の結果、学生による地域づくり活動を行うこととなり、実施主体を本作業部会からいわて高等教育コンソーシアムに移して行った。

本活動では、平成２２年９月３～５日に八幡平市兄川地区で、いわて高等教育コンソーシアム構成大学学生１４名（岩手大学５名、岩手県立大学４名、盛岡大学５名）が参加し、地域の公民館に宿泊しながら聞き取り調査や郷土料理体験等を通じて、地域住民との交流を図った。その後、聞き取り調査の結果に基づき、同年９月２５日と１０月２日に同地区内に掲示板と注意看板の設置を行った。

平成２３年２月１２，１３日には地区住民と共に雪まつりを開催し、約５０名の学生と地域住民で雪像やすべり台作りを行った。八幡平市での活動の様子はマスコミにも取り上げられた（別紙７）。

平成２３年度はいわて高等教育コンソーシアム構成大学学生２０名（岩手大学２名、岩手県立大学７名、盛岡大学９名、富士大学２名）が参加した。９月に合宿を行い、その後、地域の様々な魅力の発見と再確認、また、その発信を目的に「地域の魅力ＭＡＰ」作りを行った。このＭＡＰ作りは次年度以降も継続することとした。

また、冬季の地域活性化の取り組みとして、２月１１，１２日に、現在は廃校となっている旧舘市小学校グランドを会場に、雪まつりを開催した。今回は「絆」をテーマに、陸前高田にある「希望の灯り」の分火式や地域住民と共同での雪像作り、キャンドルナイトを行った（別紙８）。

平成２４年度はいわて高等教育コンソーシアム構成大学学生１３名が参加（岩手大４名、富士大２名、盛岡大７名）して活動を行った。今年度は地域をより深く知るために、７月には活動開始チラシの全戸配布実施や地域の祭り準備等に参加した後、９月に合宿を実施した。合宿では地域住民と共に、地域の課題の洗い出し、また、課題解決方策の検討を行い、合宿後の活動として、地域にある風穴を活用した住民交流推進策と雪上グランドゴルフ大会実施が採用された。風穴の活用に関しては、国道２８２号線沿いに風穴への案内看板を設置した。また、昨年度からの活動として「舘市魅力ＭＡＰ」完成に向けた作業を継続し、平成２５年３月に３，０００部を印刷し、八幡平市内等に配布した（別紙９）。

（３）「地域リーダー」像提言

いわて高等教育コンソーシアムから、リーダー育成に係るプログラムを立ち上げるため、本作業部会に対し、育成すべき「地域リーダー」の資質等に関する検討依頼が、平成２２年６月にあり、それを受けて「地域リーダー」像について検討を行った。検討にあたり、県内各界のリーダー５名をゲストスピーカーに招き、これまでの活動内容、リーダーに必要な資質や若者に伝えたいことなどをお話しいただき、意見交換を行った。平成２３年７

月には、これまでの検討結果をまとめた提言をいわて高等教育コンソーシアムに提出した（別紙１０）。なお、提言には当初想定していなかった復興の視点も加えた。

また提言の本作業部会での活用として、提言を広く地域に周知し、リーダー育成に役立てもらうことを目的に、フォーラム等の開催を検討し、平成２４年度に地域リーダーをテーマにＫｕｊｉ Ｃａｆｅを開催した。内容等については（２）で述べたとおりである。

（４）自己実現支援プログラム

復興を支える若手人材を育成し、被災地の復興を支援する事業として、平成２４年８月から岩手県立山田高等学校、岩手大学釜石サテライトと共同で「高校生を対象とした自己実現支援プログラム『復興とともに歩む私たちの未来』」を山田高校２年生（７６名）に対して実施した。実施にあたり、本作業部会メンバーの岩手県中小企業家同友会や関西で活動するＮＰＯ法人ｅｄｇｅ、岩手県教育委員会の協力を得て、山田高校に講師を派遣し、全１０回の講演及びグループワークを実施し、高校生に自分の将来と山田町の復興を関連付けて考える機会を提供した（別紙１１）。

プログラム実施中に行われた文化祭では、講演から学んだこと、山田町復興のために自分たちができること等をまとめ、グループ発表を行った。また、冬休み期間中の課題として、本プログラムで学んだこと等をまとめたレポートを提出させ、それを平成２５年３月に冊子にした（別紙１２）。

このプログラムで「復興は自分たちの力でするもの」という意識を持った生徒が多くおり、微力ではあるが、地域の復興を後押しできたのではないかと感じている。

３　提言

被災地は未だに復興への道を模索しているところではあるが、東日本大震災から２年が経ち、人々の被災地への関心は次第に薄れてきていることは否めず、今まさに地域力が試されている時と言えるだろう。

自己実現支援プログラム「復興とともに歩む私たちの未来」で作成した県立山田高校２年生（当時）のレポート集を見ると、「『大変ということは大きく変わるチャンス』という言葉が心に残った」と多くの生徒が記しており、「復興とは前と同じ町に戻すことではなく、前よりも良い町にすること」という言葉も多く見られた。

言葉が適切ではないかもしれないが、復興に取り組むことは、これまでに培った知識や経験を実践に移す最良の機会であり、震災前から人口減少等停滞気味であった地域を、大きく変えるチャンスと捉え復興に取り組む、という考えは、理解は得られるのではないかと思う。

被災地の住民の方々は、いつになるかわからない復興よりも、今日、明日の生活に思いを巡らせる毎日を送っていると思うが、日々の生活の積み重ねが将来に繋がると考えれば、復興した町の姿やその時の自分の生活について確固たるイメージを持ち、そのために今日何ができるか、明日何をすべきかを考えて生活することは、日々、復興に向けて進んでいることが実感でき、ハリのある毎日に繋がるのではないかと考える。

いわて未来づくり機構は、構造改革による経済や雇用の問題、少子化の進行や人口の県外流出などによる地域コミュニティーの崩壊、地域経済の縮小などの危機的状況を打破するために自治体、産業界・経済界、学術・教育機関が相互の連携と協働を強化し、明るい地域の未来づくりのために活動することを目的に設立されたが、今は東日本大震災からの復興のため、被災地の抱える様々な課題を解決するために各作業部会が取り組んでいるところである。

しかし、目の前の課題を解決するだけでなく、将来、岩手県がどうあるべきかを、ラウンドテーブルメンバーや各作業部会、機構会員が共通理解を持って活動していくことが肝要であり、それなしには県民が将来に希望を抱くことができる活動はできないのではないだろうか。

「復興」という言葉にどんな色を付けるのか、つまり復興を具体的に定義し、岩手で「復興」と言えば皆が同じイメージを持つようにすることは、まさに「未来づくり」であり、そのための活動は「地域力を支える人材育成」であろう。岩手の産学官が集う「いわて未来づくり機構」にはそのような活動を今後期待したい。

【参考】

1　作業部会開催実績

第1回：平成20年6月19日	作業部会の活動の方向について
第2回：平成20年7月24日	地域力を支える人材育成の方向と方法について
第3回：平成20年8月27日	地域（力）を支える人材育成に関するアンケート調査の実施について
第4回：平成20年11月13日	地域（力）を支える人材育成に関するアンケート調査（案）について
平成20年11月末日	アンケート調査表の作成について（メール会議）
第5回：平成21年4月6日	地域力を支える人材育成に関するアンケート調査結果、今後の本作業部会について
第6回：平成21年8月24日	活動方針：プレアンケート結果の反映と本アンケートについて
第7回：平成21年11月24日	農林分野の人材育成、本アンケート（研修プログラム調査）案
第8回：平成21年12月14日	農業公社主催「新農業人フェア」の広報、本アンケート実施案
第9回：平成22年1月12日	アンケート中間報告とデータベース化について
第10回：平成22年2月23日	アンケート結果報告、データベース、シンポジウム案について
平成22年3月17日	岩手大学にて「地域力を支える人材育成」シンポジウム実施
第11回：平成22年 4月27日	平成22年度活動計画の検討
第12回：平成22年 5月31日	地方自治体が行う人材育成事業への支援策の検討ほか
第13回：平成22年 6月28日	いわて高等教育コンソーシアムへの「地域リーダー像」提示方法の検討及び地方自治体が行う人材育成事業への支援ほか
第14回：平成22年 8月 2日	「地域リーダー像」勉強会と提言スケジュールの検討
第15回：平成22年 8月30日	「地域リーダー像」勉強会及び人材育成データベース更新
第16回：平成22年 9月30日	「地域リーダー像」勉強会及び八幡平市での人材育成事業
第17回：平成22年11月 1日	「地域リーダー像」勉強会
第18回：平成22年12月13日	「地域リーダー像」勉強会及び作業部会実績報告の検討
第19回：平成23年 1月21日	作業部会実績報告及び事業計画の検討及び「地域リーダー像」提言に係る検討
第20回：平成23年7月6日	今年度の活動計画と「地域リーダー像」提言について検討
第21回：平成23年11月16日	今年度の活動計画の具体化について検討
第22回：平成24年5月8日	昨年度活動実績と今年度活動計画について検討
第23回：平成25年4月30日	昨年度活動実績と本作業部会活動報告について検討

２　作業部会メンバー

機関名	所属名	職名	氏名	備考
社団法人岩手経済同友会	株式会社エフエム岩手	代表取締役社長	村田　憲正	H20-24
	株式会社久慈設計	代表取締役社長	久慈　竜也	H22-24
岩手県商工会議所連合会	盛岡商工会議所	事務局長	和井内信行	H20-23
国立大学法人岩手大学	理事（教育・学生担当）・副学長		玉　真之介	H20-22
	人文社会科学部	教授	後藤　尚人	H20-24 H21-24・座長
	教育学部	教授	塚野　弘明	H20-24
		教授	新妻　二男	H20-24
	工学部	教授	廣瀬　宏一	H20-24
	農学部	教授	木村　伸男	H20・座長
公立大学法人岩手県立大学		事務局長代理	久保　協一	H20
	研究・地域連携室	室長	宇部　眞一	H21-23
			鈴木　清也	H24
岩手医科大学	企画部企画課	企画課長	小野寺正二	H20-21
			高橋　真	H22-24
		係長	山中　和成	H20-23
			佐々木寛人	H24
盛岡大学		事務局長	山崎　知行	H20-24
富士大学	経済学部	教授	中村　良則	H20-22
		講師	堀　圭介	H23-24
一関工業高等専門学校	電気情報工学科	教授	豊田　計時	H20
		教授	明石　尚之	H21-24
岩手県	商工労働観光部商工企画室	主査	森田　竜平	H20-H21
			山里　善彦	H22
		主事	小野寺　学	H23
		主任主査	藤原由喜江	H24
	商工労働観光部科学ものづくり課	主査	鈴木　優	H20-21
		主任主査	熊谷　郁夫	H22-24
（岩手県市長会）	盛岡市都市整備部	部長	藤島　裕久	H20-24
岩手ネットワークシステム	国立大学法人岩手大学工学部	教授	大石　好行	H20-21
		准教授	山口　明	H22-24
岩手県中小企業家同友会		常任理事 事務局長	菊田　哲	H21-24
社団法人岩手県農業公社	農業振興部	就農支援課長	松原　一彦	H21-23
			佐々木守人	H24
株式会社惣兵衛		代表取締役	畠山さゆり	H21-24

作業部会事務局

国立大学法人岩手大学	研究交流部	研究交流部長	中島　武幸	H20-23
			佐藤　貢	H24
	研究交流部研究協力課	研究協力課長	渡邉　慎一	H20-21
			松森　康夫	H22-23
			長代　健児	H24
		主査（副課長）	鈴木　一寿	H20-22
			安藤　範夫	H23-24
		主査	濱田　秀樹	H20-21
			八重樫喜陽	H22-24

別紙１：人材育成データベース

①トップページ

岩手で、プロフェッショナルを目指す人と、人材育成プログラムを発信したい人の、集いの場
農業、工業、観光、医療、内部研修、その他、県内各分野の情報多数

地域力を支える
人材育成 データベースシステム

いわて未来づくり機構 Iwate Tomorrow Design Organization

トップページ　検索ページ　サイトの使い方　お問い合わせ

人材育成データベースとは

いわて未来づくり機構の第4作業部会では「地域力を支える人材育成」をテーマに、各種取組を行っております。
その取組の一つとして、県内の各種機関で開催している研修プログラムを取りまとめた人材育成情報データベースを作成いたしました。
この人材育成情報データベースは、例えば、

【研修の受講者】→ 各業種・各層が開催している研修プログラムの詳細の確認
【研修の主催者】→ 多様な研修プログラムの先行事例の確認と自プログラムの改善や強化

などに活用することができます。
データ内容の更新や扱う領域の拡大、関連プログラムのネットワーク化など、今後とも改善を続けて行きますので、どうぞご活用下さい。

iwate!

	外部								外部 TOTAL	内部	総合 TOTAL
	農業分野	工業分野	観光分野	医療・福祉分野	起業・経営分野	教育・学術分野	教養・文化分野	その他の分野		内部研修	
H22年度	31件	40件	7件	47件	50件	64件	49件	34件	322件	245件	567件
H23年度	1件	0件	0件	0件	1件	0件	0件	0件	2件	0件	2件
H24年度	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件
TOTAL	32件	40件	7件	47件	51件	64件	49件	34件	324件	245件	569件

新着情報・トピックス

お知らせ一覧

■ **2010-12-03 「新農業人フェアinいわて」開催のご案内**

岩手県、(社)岩手県農業公社、岩手県農業会議の主催で平成23年1月8日（土）午前11時から
アイーナ804会議室において農業を始めたい人の相談会「新農業人フェアinいわて」が開催されます。
詳細は添付ファイルをご覧下さい。

添付ファイル： 23年1月8日新農業人フェア.pdf (270.61K)

簡易検索

検索したいプログラムについての「条件」を指定し「検索」をクリックしてください。条件に合致したプログラムが表示されます。
なにも指定・入力せずに、[検索]を押すと、データベースに登録されているすべてのデータが表示されます。

キーワードから探す

- キーワード　◉AND ○OR

検索条件を指定する

- 年度　H23
- 分野　選択してください
- 開催月　選択 ～ 選択　□未定を含む
- 開催市町村　選択してください
- 開催場所
- 表示件数　◉20 ○50 ○100 ○500

検索　本年度分をすべて表示

地図から探す（H23年度5月以降の予定が表示されます）

地図の各市町村をクリックすると、市町村ごとに情報が表示されます。
下の地域のリンクをクリックすると地域別に情報が表示されます。

二戸市　軽米町　洋野町　九戸村　一戸町　久慈市　野田村　普代村　八幡平市　葛巻町　岩手町　田野畑村　岩泉町　滝沢村　雫石町　盛岡市　宮古市　矢巾町　紫波町　山田町　西和賀町　花巻市　大槌町　遠野市　北上市　釜石市　金ケ崎町　住田町　大船渡市　奥州市　陸前高田市　平泉町　一関市　藤沢町

■県北広域　■盛岡広域　■県南広域　■沿岸広域

トップページ ｜ 検索ページ ｜ サイトの使い方 ｜ お問い合わせ

②「検索結果」画面

岩手で、プロフェッショナルを目指す人と、人材育成プログラムを発信したい人の、集いの場
農業、工業、観光、医療、内部研修、その他、県内各分野の情報多数

地域力を支える
人材育成 データベースシステム

いわて未来づくり機構 Iwate Tomorrow Design Organization

トップページ　検索ページ　サイトの使い方　お問い合わせ

絞り込み検索

検索したいプログラムについての「条件」を指定し「検索」をクリックしてください。条件に合致したプログラムが表示されます。
なにも指定・入力せずに、[検索]を押すと、データベースに登録されているすべてのデータが表示されます。
キーワード、主催者、年度、分野、プログラム名、対象者、プログラム内容を指定できます。
プログラム名などのテキスト入力欄については、名称の一部を入力しただけでも検索できます。

- キーワード　◉AND ○OR
- 主催者　選択してください
- 分野　選択してください
- 開催年度　H22
- 開催月　選択 ～ 選択　□未定を含む
- 開催市町村　選択してください
- 開催場所
- プログラム名
- 対象者
- プログラム内容

検索　リセット

本年度分をすべて表示

検索結果

検索条件： 開催年度：H22年度

検索結果：1 - 20 件／567 件　　すべての詳細を表示　　20件／ページ

1 2 3 4 5 6 7 8 9 .. 29 次 >

H22年度 (567)　H23年度 (2)　H24年度 (0)

	開催月▼	開催市町村▼	主催者▼	分野▼	研修プログラム名▼	
1	4月	盛岡市	岩手県保健福祉部	医療・福祉分野	介護保険関係①【認定】①認定調査員研修 ②介護認定審査会委員研修 ②主治医研修	詳細
2	4月	盛岡市	岩手県保健福祉部	医療・福祉分野	緩和ケア医師等研修　①緩和ケア医師研修　②保健医療福祉従事者研修	詳細
3	4月	盛岡市	岩手県出納局	内部研修	出納員研修	詳細
4	4月	盛岡市	岩手県企業局	内部研修	新任職員研修	詳細
5	4月	盛岡市	岩手県教育委員会事務局	内部研修	小中学校事務初任者研修会	詳細
6	4月	盛岡市	岩手県立図書館	教育・学術分野	新任図書館長等研修会	詳細
7	4月	盛岡市	岩手県商工会連合会	内部研修	新任商工会職員研修	詳細
8	4月	盛岡市	財団法人いわて産業振興センター	工業分野	工程改善研修会	詳細
9	4月	盛岡市	国立大学法人岩手大学	工業分野	岩手マイスター育成プログラム長期講習コース	詳細
10	4月	盛岡市	国立大学法人岩手大学	教育・学術分野	少年少女のための体操競技A	詳細
11	4月	盛岡市	国立大学法人岩手大学	教養・文化分野	英語と心のしくみ	詳細
12	4月	盛岡市	国立大学法人岩手大学	教養・文化分野	教養と実践の英語活用講座	詳細
13	4月	盛岡市	国立大学法人岩手大学	教養・文化分野	ドイツ語中級講座	詳細
14	4月	盛岡市	公立大学法人岩手県立大学	内部研修	法人採用職員初任者研修	詳細
15	4月	盛岡市	岩手医科大学	内部研修	新採用職員研修	詳細
16	4月	盛岡市	岩手医科大学	内部研修	岩手医科大学緩和ケア医師研修会	詳細
17	4月	盛岡市	岩手県	内部研修	新採用職員研修（前期）	詳細
18	4月	盛岡市	岩手県	内部研修	新採用指導者研修	詳細
19	4月	宮古市	岩手県教育委員会事務局	内部研修	管内小・中学校研究主任研修会	詳細
20	4月	宮古市	岩手県教育委員会事務局	内部研修	初任事務担当者研修会	詳細

1 2 3 4 5 6 7 8 9 .. 29 次 >

トップページ ｜ 検索ページ ｜ サイトの使い方 ｜ お問い合わせ

③「詳細」表示

検索結果

検索結果: 1 - 20 件／89 件　　すべての詳細を表示　　20件 /ページ

< 前 1･2･3･4･5 次 >

H23年度　H22年度　H21年度

<table>
<tr><th></th><th>主催者▼</th><th>分野▼</th><th>研修プログラム名▼</th><th></th></tr>
<tr><td>1</td><td>岩手県地域振興部</td><td>内部研修</td><td>定住･交流サポーターズ研修</td><td>詳細</td></tr>
<tr><td>2</td><td>岩手県保健福祉部</td><td>医療分野</td><td>介護保険関係②【介護予防】介護予防研修 ①運動器の機能向上 ②栄養、口腔、閉じこもり、認知症、うつ予防</td><td>詳細</td></tr>
<tr><td colspan="5">研修･プログラム内容: 介護予防事業(特定高齢者、一般高齢者を対象)の従事者が効果的な介護予防教室の開催など必要な知識、技術を習得することを目的とする。
対象者: 市町村等の介護予防事業従事職員
2010年度受講者: ① 40名
② 100名
開催回数／年: ① 2回(1回当たり2日)
② 1回(3日)
次年度開催の有無: 有
担当部署･連絡先: 保健福祉部長寿社会課
TEL: 019-629-5436
FAX: 019-629-5439
Email: AD0005@pref.iwate.jp</td></tr>
<tr><td>3</td><td>岩手県保健福祉部</td><td>医療分野</td><td>介護保険関係③【介護予防支援】介護予防支援研修</td><td>詳細</td></tr>
</table>

別紙２ ： シンポジウム チラシ

いわて未来づくり機構「地域力を支える人材育成」シンポジウム

「地域力を支える人材育成とは」

日　時
平成22年3月17日（水）
14：00～17：10
参加費無料
（当日参加も可）

会　場
岩手大学総合教育研究棟（教育系）1階・
北桐ホール
（旧教育学部1号館）

PROGRAM

1. 受付（13:30～14:00）

2. 開会のあいさつ（14:00～14:05）
いわて未来づくり機構共同代表
岩手県知事　達増 拓也

3. 基調講演（14:05～15:05）
DABアグリ研究所長・岩手大学名誉教授　木村 伸男 氏

4. 人材育成アンケート結果報告及び人材育成情報データベースの説明
（15:05～15:40）
いわて未来づくり機構第4作業部会座長
岩手大学大学教育総合センター教育評価・改善部門長　後藤 尚人

【休　憩】

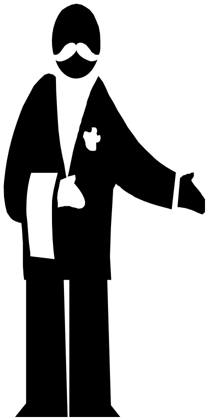
5. パネルディスカッション（15:50～17:10）
～地域力を支える人材育成とは～
（パネラー）
紫波町経営支援部企画課協働支援室 主事　高橋 哲也 氏
一関工業高等専門学校　教授　明石 尚之 氏
和同産業株式会社執行役員 環境事業部部長　林 俊春 氏
株式会社惣兵衛代表取締役　畠山 さゆり 氏
（コメンテータ）
DABアグリ研究所長　木村 伸男 氏
（モデレータ）
いわて未来づくり機構第4作業部会座長
岩手大学大学教育総合センター教育評価・改善部門長　後藤 尚人

6. 閉会のあいさつ
いわて未来づくり機構共同代表
岩手大学長　藤井 克巳

【問い合わせ先】
岩手大学研究交流部研究協力課総括・研究協力グループ　濱田
〒020-8550　盛岡市上田三丁目18-8
TEL:019-621-6851　／　FAX:019-621-6995
E-mail:kenkyou@iwate-u.ac.jp

主催：いわて未来づくり機構

MIU Cafe in アイーナ



インテレクチャルカフェとは？

－ MIU Cafeに学ぶ 異分野交流 －

いわて未来づくり機構
「地域力を支える人材育成」作業部会 人材育成支援事業

日　時：平成22年6月28日（月）15時～

場　所：岩手県立大学アイーナキャンパス学習室1

定　員：　40名

対　象：　県内地方自治体・県内企業・いわて未来づくり機構会員
その他一般市民

話題提供及びファシリテーター：

岩手大学地域連携推進センター　今井　潤　准教授

岩手大学地域連携推進センター　及川　隆　共同研究員
（盛岡市商工観光部企業立地雇用課主査）

主　催：　いわて未来づくり機構、岩手大学地域連携推進センター、盛岡市、岩手ネットワークシステム
岩手県中小企業家同友会・JSTイノベーションサテライト岩手

参加申込：　6月21日（月）までに下記へ連絡願います
いわて未来づくり機構「地域力を支える人材育成」作業部会事務局
岩手大学研究交流部研究協力課　八重樫　喜陽

E-mail:mirai4@iwate-u.ac.jp　FAX:019-621-6995　TEL:019-621-6851

別紙４：第1回 Kuji Cafe チラシ

Kuji Cafe

Kuji Caféはテーマに対して、話題を提供し
皆さんで、勉強し意見交換をする場です。

～ 第1回 テーマ ～

再生可能エネルギーに着目した
久慈地域の未利用資源の可能性

日　時：平成23年11月28日（月） 14:30-17:30
場　所：久慈グランドホテル　7Fスカイホール
話　題：「太陽光発電と環境エネルギー収穫の
　　　未来を考えよう」
　　　岩手大学　名誉教授　馬場　守　氏
　　　「木質バイオマスエネルギー利用の展望」
　　　岩手大学農学部　助教　伊藤　幸男　氏
参加費：500円（コーヒー、資料代として）
定　員：30名（先着順）
交流会：Kuji Café終了後に希望者のみ
　　　（会費4,000円）
申込先：久慈市総合政策部産業開発課（間峠）
　　　電話:0194-52-2369 FAX:0194-52-3653

主　催：久慈市、いわて未来づくり機構
共　催：岩手大学地域連携推進センター
後　援：岩手県県北広域振興局、久慈商工会議所、（社）久慈青年会議所、久慈地域雇用創造協議会、INS「海洋と社会」研究会久慈支部

別紙５：第2回 Kuji Cafe チラシ

Kuji Cafe

Kuji Caféはテーマに対して、話題を提供し
皆さんで、勉強し意見交換をする場です。

～ 第2回 テーマ ～
「よそ者・若者・馬鹿者」視点による地域活性化

日　時：平成24年3月21日（水） 18:00-20:00
場　所：やませ土風館 1F 多目的ホール
話　題：「住民主体のまちづくりを育む契機として～2地域での事例を踏まえて～」
岩手大学大学院 農学研究科 1年
菊地 小百合 氏
「既存観光資源を活用した若年層へのアプローチ手法の検討」
岩手大学農学部 4年 小髙 直人 氏
「有機農業と提携に基づく合自然的な農山村地域像の検討～久慈市を対象地として～」
岩手大学大学院 農学研究科 2年
岸岡 健太 氏

参加費：無料
定　員：50名（先着順）
交流会：Kuji Café終了後に希望者のみ（会費4,000円）
申込先：久慈市総合政策部産業開発課（間峠）
電話:0194-52-2369 FAX:0194-52-3653

主　催：久慈市、いわて未来づくり機構
共　催：岩手大学地域連携推進センター
後　援：岩手県県北広域振興局、久慈商工会議所、（社）久慈青年会議所、久慈地域雇用創造協議会、INS「海洋と社会」研究会久慈支部

Kuji Café 2012

Kuji Caféはテーマに対して、話題を提供し
皆さんで、勉強し意見交換をする場です。

～ 第1回 テーマ ～

「地域リーダー像を考える」

日　時：平成24年7月5日（木）18:00-20:00
場　所：久慈グランドホテル　2階　平庭の間

話　題：今こそ求められる「地域リーダー」
いわて未来づくり機構「地域力を支える人材育成」作業部会
座長・岩手大学人文社会学部　教授　　後藤　尚人　氏
株式会社エフエム岩手　代表取締役社長　村田　憲正　氏
岩手ネットワークシステム（INS）事務局・
岩手大学工学部　准教授　山口　明　氏

参加費：無料
定　員：30名（先着順）
交流会：Kuji Café終了後に希望者のみ（会費2,500円）
申込先：岩手大学地域連携推進センター
久慈市派遣共同研究員　小野
電話：019-621-6294　FAX：019-621-6892
e-mail：yono@iwate-u.ac.jp
（FAXの場合は裏面の申請書をご利用ください）

主　催：久慈市、いわて未来づくり機構
共　催：岩手大学地域連携推進センター

別紙７：H22度 学生による地域づくり活動 in 八幡平市 新聞記事等

2010年9月6日
岩手日報13面

地域振興の 兄川地区の魅力に
八幡平市で3大学の学生
交流通じ対策提案

岩手大、県立大、盛岡大の学生14人は5日までの3日間、八幡平市の兄川集落で地域づくり活動を繰り広げた。秋田県鹿角市に隣接し森林に囲まれた農村地域に寝泊まりし、住民との温かい交流を通じて地域の課題と魅力を調査。若い感性でユニークな地域振興策を提案した。

八幡平市といわて高等教育コンソーシアムの主催。これまでも同コンソーシアムが募集して学生が地域づくり活動を行ってきたが、3大学が交じった活動は初めてとなる。

地域住民との交流を通じて考えた兄川集落の地域振興策を提案する学生

学生は兄川公民館に宿泊し、3班に分かれ地域づくりのテーマを設定。地域課題や魅力について、各戸を歩き住民へのインタビュー調査などをした。伝統芸能の兄川先祓いを見学し、郷土料理のみそ付けたんぽ作りを体験して地域に根付いた文化も吸収した。

地域振興策への議論を重ね、5日は班ごとに成果を発表。「自然豊かで自給自足が可能。星がきれい」「人口減少に歯止めをかける仕事が必要」など魅力や課題を紹介した。

「他の過疎地域と交流するべき」「ご当地ヒーローのハチマンタイラーと一緒に都会の子どもが農林業体験を行うツアーを」「地域に情報発信する兄川産木材を使った掲示板を作っては」などの提案もした。すぐ実現可能な提案については今後さらに検討を続ける。

岩井紗智さん（岩手大工学部2年）は「将来、地域づくりに参加したい。自分の古里ともどう付き合っていくか考える、とてもいい経験となった」と充実感を漂わせた。

佐藤敏彦兄川地区自治会長(57)は「希望のある話が多く出た。短い期間でよくまとめた。これからも継続的に交流していきたい」と目を細めた。

2010年9月4日
日本農業新聞13面

若者の目で地域振興
岩手県内大学5校 集落の魅力や課題探る

岩手大学、岩手県立大学など同県内の5大学でつくる「いわて高等教育コンソーシアム」は3日、八幡平市で学生による地域振興策の調査を始めた。複数の大学の学生が共同で集落の魅力や課題を掘り起こし、解決策や振興策の提案などに取り組む。市も協力する。同コンソーシアムと自治体が共同で事業を行うのは初めて。

参加したのは岩手大学、県立大学、盛岡大学の学生14人。秋田県との境に近い安代地区の兄川集落を訪れ、地元の伝統芸能の歴史や特徴などを住民らから聞き取った。調査は5日まで行い、集落の産業や歴史、地理などのデータを通じて集落の実態を把握する。

同コンソーシアムは複数の大学が連携し、単位の互換や教員の資質向上などに取り組んでいる。今回の調査では、地域振興のために、学生という「外の目」「若者の目」を通して地域を見つめ直し、住民だけでは見つけにくい魅力や課題を探す。来年2月をめどに具体的な提案などをまとめる予定だ。

学生を引率する岩手大学教育学部の新妻二男教授は、「大学の授業などで学んで得たイメージと現実との違いを感じてほしい」と話す。また八幡平市も「地域を知ってもらい、魅力や課題の中から若者らしい提案が生まれてほしい」（安代総合支所）と期待を込めた。

2010年9月26日
岩手日報20面

兄川地区つなぐ看板製作
3大学学生 振興策の一部実現

八幡平市

八幡平市兄川の兄川公民館で25日、岩手大、県立大、盛岡大の学生が地区内に立てる看板と掲示板作りをした。今月上旬、同地区に泊まり込んで行った地域づくり活動で提案した地域振興策の一部を実現した。

学生10人がのこぎりで木材を切り、ペンキを塗って智恵の滝への案内板や釣り客へ遊漁券の携行を訴える看板などを製作した。

掲示板を作った佐藤淳哉さん（盛岡大文学部3年）は「行事など住民同士の交流に活用してほしい」と願い、兄川地区行政連絡員の佐藤敏彦さん(57)は「学生との交流が活性化のきっかけになる。交流を続け、地域でも振興策を考えたい」と意気込む。

学生は今月上旬、2泊3日で住民と交流を深めながら兄川地区の魅力や課題をとらえ、ユニークな地域振興策を提案していた。

地域に情報発信するための掲示板を製作する学生たち

2011年2月4日
毎日新聞25面

学生がまちおこし
岩手・県立・盛岡3大学
八幡平市兄川地区
掲示板で情報、雪祭りなど


昨年9月の合宿で住民に聞き取りをする学生たち＝八幡平市兄川で（岩手大提供）

岩手、県立、盛岡の3大学の学生が共同で、高齢化が進む八幡平市兄川地区のまちおこしに取り組んでいる。大学横断的な地域づくり事業は初の試み。企画した県内の5大学でつくる「いわて高等教育コンソーシアム」は、新たな地域づくりのモデルになればと期待している。【山中章子】

10年春、八幡平市から「学生に地域振興策を考えてほしい」という要望があり、企画が動き始めた。コンソーシアムの各大学が興味を持つ学生を募ると、3大学の1～3年計14人が集まった。

兄川は秋田県境に位置し、人口約150人のうち60歳以上が5割を占める。学生たちは9月、2泊3日の合宿で地元公民館に泊まり込み、住民との交流や対面の聞き取り調査を通して課題を明らかにし、解決策を考えた。

その結果、「働く場がなく、若者が離れてしまうため、自然を生かしたツアーや学生向けの合宿を企画、誘致する」「地域活動への参加を促進するため、掲示板を設置し、情報共有を図る」などの解決策を住民の前で提案した。提案だけに終わらず、10月には実際に掲示板や看板を手作りして数カ所に設置した。

また今月12、13日には廃校になった舘市小学校の校庭で雪祭りを開く。学生と住民が一緒に雪像やかまくら作り、雪遊びをする予定で、これも「冬は豪雪で人との交流が減る」という課題に対する解決策の一つだ。

岩手大工学部2年、岩井紗智さん(20)は「他大学でも目的を同じくする者同士で議論でき、兄川の人の生活にも触れて良い刺激を受ける」と話す。八幡平市の職員で、岩手大に派遣された金田一捷誠共同研究員は「外の若者の目を通して地域の良さに気づき、住民同士のコミュニケーションが増した」と効果を実感している。事業は来年度以降も継続する。

舘市地区 雪で元気に

八幡平市 学生がまつり企画


歓声を上げ、そり滑りを楽しむ子どもたちと学生

岩手大と県立大、盛岡大の学生が企画した雪まつりが12、13の両日、八幡平市舘市の旧舘市小校庭で開かれ、子どもたちの笑い声が響いた。

まつりは、昨年9月に舘市地区の兄川集落で行った地域づくり活動の際、提案した地域振興策。学生約50人を含め、地域住民ら計80人が4基の大きな雪像やかまくらを作り、滑り台で一緒に遊び歓声を上げた。

子どもたちと一緒に廃油で作ったキャンドルを「舘市」の文字に並べた雪灯籠にともし、キャンドルナイトも楽しんだ。昼食は地域の女性が作った豚汁やおにぎり、漬物を囲んで、学生と住民が和やかに懇談した。

まつりを企画した岩手大工学部2年の及川大智さんは「予想以上にみんな楽しんでくれた。住民が楽しい活動に参加し、活用しようと思う気持ちが大事。発信の分野でも力を入れたい」と話した。

舘市地区振興協議会の山本清会長(61)は「雪は邪魔者だったが、冬も考えようで楽しめることが分かった。若い人の感覚が刺激になり、雪上パークゴルフなどいろいろな発想が生まれる」と喜んだ。

2011年2月15日
岩手日報15面

大学間、地域連携の課題探る

いわて高等教育コンソーシアム 学生ら活動報告

県内5大学(岩手大、県立大、岩手医大、富士大、盛岡大)からなる「いわて高等教育コンソーシアム」のシンポジウムは19日、盛岡市のホテルで開かれた。大学関係者や学生ら約150人が同コンソーシアムの事業の在り方や大学間や地域との連携の可能性を探った。


地域参加活動の内容や成果を報告する学生

同コンソーシアムは2008年10月に設立。本年度までの活動の振り返りとして、学生らが地域参加活動や国際交流事業の成果と課題を報告した。

岩手大工学部2年の岩井紗智さんは同大、県立大、盛岡大の学生14人が参加した「学生による地域づくり活動in八幡平市」について発表。同市兄川地区は雪が多く、冬は活気がないという課題を知り、学生主体で雪祭りを開催したことなどを紹介した。

岩井さんは「地域づくりは地域の魅力や強みを知り、発信することや人と人のつながりが大切だと実感した。5大学や学生同士、学生と地域の輪を広げていきたい」とまとめた。

5大学の学長の講演や意見交換も行われた。

2011年2月20日
岩手日報24面

2011 年 2 月 17 日
テレビ岩手「ニュースプラス１いわて」













別紙８：H23度 学生による地域づくり活動 in 八幡平市 新聞記事

舘市地区の魅力探る

八幡平市で 県内大学生 活性化策を提言

第2回学生による地域づくり活動ｉｎ八幡平市は19日までの3日間、同市舘市地区で行われた。県内４大学の学生17人が合宿し、地域住民と交流しながら地域の魅力を調査。若い感性で活性化策を提案した。

岩手大、八幡平市、いわて未来づくり機構、いわて高等教育コンソーシアムの共催。岩手大、県立大、富士大、盛岡大の学生が参加した。

学生は舘市公民館に寝泊まりしながら、４班に分かれて炭焼きや、郷土芸能「先祓(はらい)い」を見学。住民に聞き取りして地域の課題や魅力を把握した。班ごとにテーマを見つけ、19日は振興策を発表した。

リンドウ農家に住み込んでの職業体験や、山菜採りや炭焼き、雪遊びなどを体験する子どものためのグリーン・ツーリズムツアーなどを提案した。

昨年、舘市地区の兄川集落に設置した地域情報を発信する掲示板は、人の目につきやすいごみ集積場付近に設置した方がいいなどの意見も出た。

昨年に続き参加した県立大総合政策学部４年の三浦伊代さんは「掲示板の課題なども分かった。もう一度設置したいし、ほかの提案についてもできることを一歩一歩実現させたい」と力を込めた。

舘市地区振興協議会の山本清会長(61)は「住民では気付かない新たな魅力の発見もあった。頂いた提言を一つでも実現できるよう頑張りたい」と意気込んだ。



地域住民との交流を通じて考えた振興策を発表する学生たち

2011年9月20日
岩手日報19面

内陸部

舘市前進願い 希望の灯り

八幡平市で「雪まつり」

県内の大学生が企画した「雪まつり2012—絆」は11、12の両日、八幡平市舘市の旧舘市小校庭で開かれている。11日は陸前高田市の「3・11希望の灯（あかり）り」から分灯した灯りを設置。住民らが地域おこし活動の前進を願った。

陸前高田から分灯

同日は岩手大、県立大、富士大、盛岡大の学生や地域住民ら約40人が参加。陸前高田市小友町の気仙大工左官伝承館にある「3・11希望の灯り」から10日に分灯したランタンが、3・11希望の灯り協議会の藤原直美会長(68)から舘市地区振興協議会の山本清会長(62)に手渡された。

ランタンの灯は地球をかたどった雪像に置かれたランプに点灯。東日本大震災が発生した午後2時46分に全員で黙とうをささげた。

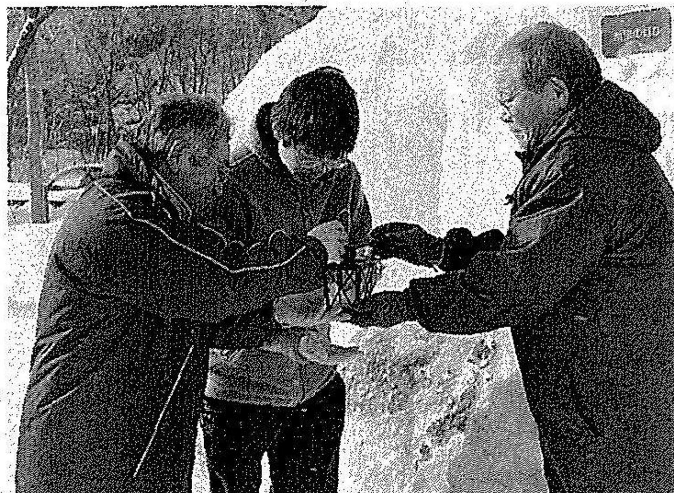
陸前高田市の「希望の灯り」は種火を阪神大震災で被災した神戸市から受け継いだ。藤原会長は「希望の灯りは生き残った人のための灯り。希望を持って前進しようとするところに使ってほしい」と願った。

県立大社会福祉学部3年の堀切春花さんは「希望の灯りには、震災に限らずさまざまな問題に向き合い前に進もうとの思いが込められていると聞いた。舘市地区も一歩前進してほしいとの願いを込めた」と狙いを話す。

山本会長は「若い人たちの発想がとても刺激になっている。住民が主体となって地域づくり活動を継続していきたい」と意気込む。

絆主題に学生企画 多彩な行事きょう本番

12日は雪像作りや雪上パークゴルフのほか、雪でかたどった「絆」の文字の上に希望の灯りの火をつけたろうそくを並べるキャンドルナイトも行われる。



藤原直美会長（右）からランタンを受け取る山本清会長（左）

2012年2月12日
岩手日報18面

別紙９：館市魅力MAP

八幡平市 舘市 魅力MAP

学生による地域づくり活動in八幡平市



この「舘市魅力MAP」は、「学生による地域づくり活動in八幡平市（主催：八幡平市、いわて高等教育コンソーシアム、いわて未来づくり機構）」による取り組みの１つで、魅力溢れる舘市地区を多くの方々に知ってもらい、地域住民と地域の外の人たちを"舘市LOVE"で繋げよう！と考えて作成しました。

いわて高等教育コンソーシアム構成大学の学生のべ36名（2011年度：岩手大学３名、岩手県立大学９名、富士大学２名、盛岡大学９名、2012年度：岩手大学４名、富士大学２名、盛岡大学７名）が、舘市地区をくまなく歩き、地域の方々には「日常の風景」でも、学生にとって「魅力的」に映った場所を、その歴史やエピソードを地域の方々にお聞きしながら地図にまとめました。

舘市地区には、魅力的な場所がまだまだありますし、一番の魅力はこの地区に住む人々の「心の豊かさ、あたたかさ」なので、まずは一度、舘市地区を訪れ、全身で魅力を感じてもらえると嬉しいです。

※注意
地図上の位置は、あくまでも目安で、実際と異なる場合がありますのでご了承ください。また、道が十分に整備されていない所もありますので、準備をして訪れるようにしてください。

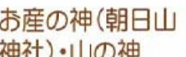
製作：2011・12年度【学生による地域づくり活動 in 八幡平市】参加学生
主催：八幡平市、いわて高等教育コンソーシアム、いわて未来づくり機構
〒020-8550 岩手県盛岡市上田3−18−8 いわて未来づくり機構 第4作業部会事務局（岩手大学研究協力課内）
TEL 019-621-6851

① 炭焼き小屋

炭生産が主幹産業だったこの地区に、現在ある炭焼き小屋はここだけです。阿部さんが昔ながらの方法で炭焼きをしています。(私有地内のため見学は了解を得てからしてください)。



② 兄畑駅



上下合わせて14本の列車が止まる無人駅です。春のプラットホームでは桜の花が皆さんをお出迎えします。隣接するトイレは定期的に地区の方々が清掃しているので気持ち良く使うことができます。

③ 米代川

名前の由来は『ダンブリ(とんぼ)長者の伝説』からだとか。日本海へと注ぐ川で、カジカ取りや川下りなどが楽しめます。

④ 舘市公民館



舘市地区の公民館。各種教室が開かれ、住民の重要な集いの場となっています。

⑤ 旧舘市小学校



皆の思い出が詰まった小学校（統合により2004年閉校）。昔の校庭はパークゴルフ場に整備され、住民の社交場となっています。

⑥ お産の神(朝日山神社)・山の神



300年の歴史があるこの神社。お産の神には、昔は他の地区からも妊婦さんが参拝に来たそうで、沢山の人形が供えられています。山の神には市の指定文化財の山神様の像が祀られています。（どちらも私有地内のため参拝は了解を得てからにして下さい）

⑦ 何太良神社

『あだら神社』です。『なんたら神社』ではありません。境内は見晴らしがよく、絶景ポイントです。



⑧ 佐藤商店



兄川地区唯一のお店。渓流釣りの遊
券もこちらで購入できます。

⑨ 兄川公民館脇の神社

兄川地区の神輿が祀られている神社です。先祓いの際は、神様が降りてくる場所で、神様の乗った神輿が氏子たちに担がれ、兄川稲荷神社に運ばれます。



⑩ 兄川先祓い・兄川稲荷神社

八幡太郎義家の家来が、京都の伏見稲荷神社の分神を祀り、神が毎年村内を一巡するとき神輿渡御の先頭にたって舞ったとのいわれがあり、市の指定無形民俗文化財に指定されています。毎年7月の兄川稲荷神社祭典で披露されます。

⑪ 勇気の滝

智恵の滝に比べると小ぶりですが、迫力は十分！智恵の滝まで行くにはちょっと…という方におすすめです。

※注意 「勇気の滝」は学生のつけた通称で、滝の本当の名前は分かりません。「勇気の滝は?」と聞いても地域の人は分からないかも知れませんのでご了承ください。

⑫ 舘市館跡

この地区の名前の由来となった、敵の襲来を監視するために作られた館（城）です。鳥居をくぐり、しばらく登ると八坂神社があり、その西側（兄川方面）に見える高台に館があったそうです。館跡の周りの窪地はお堀の跡だとか…

注意　①地図上の位置は、あくまでも目安で、実際と異なる場合があります。　②道が十分に整備されていない場所もありますので、準備をして訪れるようにしてください。　③自然豊かな場所ですので、時期によってはクマやハチに十分注意してください。

八幡平市 舘市 魅力MAP

学生による地域づくり活動in八幡平市

氣比風穴（気ノ下風穴）

一年中、涼しい空気に包まれている場所です。まさに自然の神秘!

「またひとつ、魅力発見!」

智恵の滝

車を降りてから約2kmの山歩きの先に地区一番の滝があります。まさに『秘境』と呼ぶにふさわしい所です。滝までの道は起伏があって、運動不足解消にもってこい。滝のように流れる汗も見ることができるでしょう。

兄川

知る人ぞ知る渓流釣りのメッカです。地域の貴重な資源ですので、遊漁券の購入やゴミの持ち帰り等マナーを守って楽しんでください。

① 炭焼き小屋
② 兄畑駅
③ 米代川
④ 舘市公民館
⑤ 旧舘市小学校
⑥ お産の神・山の神
⑦ 何太良神社
⑧ 佐藤商店
⑨ 兄川公民館 脇の神社
⑩ 兄川先祓い・兄川稲荷神社
⑪ 勇気の滝
⑫ 舘市館跡

戸鎖神社

川下りも楽しい☆

祭典では、春興に先立って兄川稲荷神社まで先祓い舞いを踊りながら行する場子が見られるよ。

別名兄川舞とも呼ばれる兄川先祓い

冬の兄川

舘市館跡は、八坂神社の鳥居から入った小高い場所にあるよ。

舘市の皆さんありがとうございました。

兄畑中川原、沖ノ平、小岩井、兄畑公民館、兄畑森林事務所、兄畑簡易郵便局、消防屯所、作平、兄川公民館、安比高原・智恵の滝方面、佐比内、佐比内公民館、白沢口、長坂、戸鎖、戸鎖公民館、田山駅、田山スキー場、田山トンネル、佐比内トンネル、兄畑トンネル、JR花輪線、東北自動車道、米代川、舘市、兄川、秋田県（湯瀬・鹿角）、盛岡

交通のご案内

兄畑、田山、安代I.C.、安代J.C.、松尾八幡平I.C.、西根I.C.、荒屋新町、安比高原、大更、好摩、滝沢I.C.、盛岡I.C.、盛岡、いわて沼宮内

● 自動車

盛岡I.C. ―東北自動車道― 安代I.C. ―国道282号― 田山 ― 兄畑（約30分、約30分、約15分）

● 列車

盛岡駅 ―IGRいわて銀河鉄道― 好摩駅 ―JR花輪線― 荒屋新町駅 ― 兄畑駅（約100分、約20分）

学生による地域づくり活動 in 八幡平市　過去の活動

2010年度	●「クマ注意」など注意看板及び地区掲示板の作製 ●「雪まつり」の実施
2011年度	●魅力MAP作り開始　●「雪まつり」の実施
2012年	●地区行事（米代川川下り、兄川先祓い）への参加 ●氣比風穴への案内標示作製　●魅力MAP作り ●「昔の遊び体験」実施

◎現地の詳しい地図は Googl MAP「舘市魅力MAP」でご覧になれます。　舘市魅力MAP　検索

製作：2011,12年度「学生による地域づくり活動 in 八幡平市」参加学生（岩手大学、岩手県立大学、富士大学、盛岡大学）、八幡平市舘市地区の皆さん

別紙10：「地域リーダー」像提言

平成 23 年 7 月 13 日

いわて高等教育コンソーシアム
運営委員会委員長
高畑 義人　様

いわて未来づくり機構「地域力を支える人材育成」作業部会
座長　後藤 尚人

いわて高等教育コンソーシアム「地域リーダー育成プログラム」に係るリーダー像について（提言）

【経緯】

いわて高等教育コンソーシアム運営委員会の玉真之介委員長（当時）から、平成 22 年 6 月 17 日付で、本作業部会座長宛に、コンソーシアムで実施することとなる「地域リーダー育成プログラム」の具体化に資するため、岩手の地域社会を牽引して行くリーダー像と求められる能力や資質等について検討し、平成 22 年度末までに提言して欲しい旨、依頼があった。

本作業部会では、平成 22 年 6 月 28 日に開催した第 13 回作業部会会議において、上記依頼を受けとめ、本作業部会を通して「地域リーダー像」に関する勉強会を行い、年度末に提言を出すこととした。

勉強会は、県内各界のリーダーをお招きし、自身の活動を通して苦労した点や注意した点について、また、後進への助言や岩手を活性化するための視点などをお話し頂き、作業部会委員と意見交換する形で、以下のとおり 5 回行なわれた。

１）H22/08/02：産学官連携リーダー：岩渕明（岩手大学理事・副学長）
２）H22/08/28：地方自治体首長：中村哲雄（前葛巻町長、中村牧場・中村家畜診療所所長）
３）H22/09/30：NPO 主宰：両川いずみ（NPO いわて子育てネット副理事長・事務局長）
４）H22/11/01：地方自治体・行政職リーダー：浅沼康揮（岩手県総務部人事統括課長）
５）H22/12/13：企業経営者：村井良隆（あさ開代表取締役社長）

平成 23 年 1 月 21 日の第 19 回作業部会会議で上記勉強会について総括し、各委員からの意見をもとに座長が提言の原案を作成して、年度内の第 20 回作業部会会議で取りまとめることとした。

その後、東日本大震災が勃発し、作業部会の活動は中断、未来づくり機構の在り方そのものも問い直されることとなり、提言の取りまとめを行う本作業部会の会議開催が遅れる事態となった。このような事情があるとはいえ、提言の取りまとめが大幅に遅れることになったことについては、関係各位へお詫びしたい。

以下につづく提言は、上記勉強会にゲストスピーカーとしてお越し頂いたリーダーの方々ならびに議論に参加頂いた委員の方々の見解をもとに作成されており、貴重なご意見を頂いた各位には謝意を表したい。

地域社会を牽引して行くリーダー像と求められる能力や資質について（提言）

Ⅰ　リーダー像

【多様なリーダー】

本作業部会では、当初より、「ある特定分野での「リーダー」像１つだけを挙げるのではなく、地域のリーダー、職場のリーダーなど、様々な場面で必要となるリーダーのスキル等を提言すること」（第 13 回作業部会メモ）として作業を進めてきた。それは、「地域社会を牽引して行くリーダー」といえども、多種多彩なリーダー像が想定され、また、組織のトップはリーダーであろうが、リーダーはトップだけでなく各階層にも存在し、それぞれの場面に応じてリーダーの役割も多様だからである。

【リーダーになる過程】

リーダーになる過程は、選別方式で見れば、１）選挙されてなる、２）努力･奮闘してなる、３）任命によってなる、という三つのタイプに区分されると言われている(1)。

勉強会でお招きした産学官及び NPO のリーダーとの意見交換からは、リーダーとなる過程において、自身を牽引してくれた先導者との出会いや自身が置かれた境遇・環境がトリガーとして重要であったことが伺える。リーダーは、自ら進んでなるというよりは、潜在能力がある人にリーダーとしての役割が外部から要請されてなる場合が多いように思われる。

注 (1)：cf. アメリカ海軍協会『リーダーシップ：アメリカ海軍士官候補生読本』(1959)、武田文男・野中郁次郎 訳、生産性出版、1981、新装版 2009、p.8

【地域社会を牽引して行くリーダー像】

多様なリーダーのタイプがあることや、リーダーが生まれる場合の外的要因の重要性を了解しつつ、本作業部会では「地域社会を牽引して行くリーダー」（地域リーダー）について、以下のように提案したい。

１．地域社会に愛着を持ち、地域を牽引する情熱と活力を持ち合わせている人

２．地域社会をよく知り、地域の将来展望を描ける人

３．他の地域との関連において自らの地域をとらえる複眼的視野を持っている人

４．自らの職務を超えて地域社会に貢献できる人

５．年齢や地位にかかわらず、地域社会に溶け込み、地域社会を内側から牽引できる人

６．地域の課題を把握し、改善策を立案・計画し、それを成し遂げることができる人

７．地域が遭遇する想定外の事態にも迅速に対応し、素早い決断と行動ができる人

８．職務権限によらず、組織の大小にかかわらず、組織をマネジメントできる人

９．リーダーシップはもとより、フォロワーシップも理解している人

１０．フォロワーがリーダーになるための次世代育成(2)ができる人

注 (2)：勝利する企業にはあらゆる階層にリーダーがいて、そのようにあらゆる階層にリーダーがいるのはトップリーダーがリーダーの育成を重視しているからだという「リーダーシップ･エンジン」の考え方をさらに深めて、組織としての「リーダーシップ･サイクル」の確立が次世代リーダーの育成には欠かせないという指摘がある。cf. ノール・M・ティシー＆ナンシー・カードウェル『リーダーシップ・サイクル』(2002)、一條和生 訳、東洋経済新報者、2004

Ⅱ　リーダーに求められる能力と資質

先に示した「地域社会を牽引して行くリーダー像」の項目に対応するものとして、以下に各々の能力と資質及びそれらの修得可能性について言及する。

１．地域への愛着・情熱と活動力

地域社会を牽引して行くためには、地域への思い、愛着、情熱が活動の原動力となる。

このような地域への熱い思いは、学習して修得するものではないが、地域住民でなくとも、何らかの形で地域社会への関わりを持つことで芽生え、その関わりが増すにつれて増大することがある。

２．将来を見通す眼力

リーダーには必ず将来への展望、ビジョンが求められる。将来のあり得るべき姿を提示し、その実現に向けて人々を動かす力が問われるわけである。将来を見通す先見性を備えることで、将来ビジョンを語ることが可能になると考えられる。

この能力は、個人に備わる生得的な《感覚》ではなく、地域をよく知り、地域を取り巻く世界の動静（経済状況や国際情勢など）から予測し得る能力で、後天的に獲得することが可能な能力である。

３．他者の目・複眼的視野

地域の課題や問題のみならず、地域の特色や豊かさは、往々にして地域住民には気がつかないことがある。地域を理解するには、地域を相対化する必要がある。自己を他者の目から見つめ直すように、地域を外から見直すことができるような複眼的視野を持つことが求められる。

岩手をよく知るには、岩手から一度離れて、外部の視線で岩手を見つめ直すことが効果的であろう。また、岩手以外の人々との交流を深め、他者の意見を知ることでも岩手を相対化することはできる。

４．マルチタスク能力

職務上のリーダーシップを発揮するだけではなく、職務を超えて地域社会に貢献するには、職務と同時に異質な環境で異質な業務を遂行する必要がある。多様な仕事を的確にこなすためにも、マルチタスク能力が問われよう。

複数の案件を同時期にこなすことは、そのような境遇になれば誰しもおのずと行っていることで、そのための特別な訓練を要することもないと思われるが、その能力を職務以外に向けられるかどうかは、さまざまな要因に起因すると思われる。

５．幅広いコミュニケーション能力

どのようなリーダーであれ、単なるプレゼンテーション能力ではなく、異なる意見を持った人、異なる年代の人、あるいは外国人と折り合いをつけながら仕事を進めることができる能力が必要となる。ここには、自らの意見を的確に伝えることのできる能力、異なる意見を傾聴し・まとめる調整能力、ひいては外国語の運用能力などが含まれる。

こうした広義のコミュニケーション能力は、さまざまな共同作業を実践していく過程で培われであろう。

６. 課題の探究、問題点の把握、解決策の立案・計画・実行を成し遂げる能力

現状を調査し、問題点を見出し、改善策・解決策を立案・計画し、それを最後までやり遂げる能力がリーダーには求められる。課題探究、問題発見、企画・立案、計画、実行などの能力に加え、事業を完遂するにはその計画への情熱とリーダーとしての責任感が必要となる。

課題探究能力等は問題解決型のトレーニングを積むことで修得することができる。一方、情熱については、立案からプラン作りに関わる度合いに応じて、また、責任感については、リーダーとしてその事業を任せられることによって生じると思われる。

７. 危機管理能力と柔軟な思考

ここでは、想定外の事態に素早く対応し、情報を収集し、状況を把握し、決断して実行するといった一連の能力を想定している。緊急時にはリーダーに決断を求められるため、リーダーは常に対応策を準備しておくことが肝要である。

災害や事故などが発生しても限られた資源で事業の継続を可能にする BCP（Business Continuity Plan：事業継続計画）を企業が策定しているように、平時から常に緊急時に備えておくことは可能であろう。また、情報収集能力は、情報源の他チャンネル化や有力なネットワークの確保に務めるなどで強化することができる。状況判断と決断力については経験に左右される度合いが大きそうである。

一方で、判断が経験に基づくとはいえ、過去の成功事例にとらわれて保守的になったり、現状に満足することなく、状況に応じて適切かつ柔軟に対応できる能力をリーダーは持ち合わせて欲しい。この能力は、イノベーションを生み出す重要なファクターともなる。

８. 組織のマネジメント能力とバランス感覚

組織をより良く動かすためにもマネジメント能力は欠かせない。マネジメント能力を発揮するためにも、リーダーは組織の全体像を把握する必要がある。現場を知らずして指示を出すだけでは組織は動かないし、近視眼的思考では、組織を機能させることはできない。

マネジメント能力の育成については、ドラッカー(3)をはじめ文献には事欠かない。ただし組織を把握するということは、そこに所属する構成員の把握であり、人間の把握にほかならない。構成員の個性を見極め、適材適所で構成員の能力を引き出すためにも、人間を見抜く洞察力と、人間を動かすためのバランス感覚を備えておきたい。

注(3)：cf. ピーター・F・ドラッカー『マネジメント ― 課題、責任、実践』(1973)、上田惇生 訳、ドラッカー名著集 13～15（上中下）、ダイヤモンド社、2008

９. リーダーシップとフォロワーシップ

リーダーである以上は、リーダーシップを理解し、それを発揮する必要がある。

リーダーシップは先天的な才能であったり、体験的に身につけるものであるため教えることができないとの指摘は根強いが、「リーダーシップとは学習によって身につけられる、あるいは身につけるるべきもの」(4)という見解も多い。

リーダーはまた、フォロワーシップについても十分理解しておく必要がある。リーダーになる前は誰でもフォロワーであるため、経験知的にフォロワーを捉えることはできるが、信頼できるフォロワーを獲得するには人間関係の原則を学ぶ(5)ことが近道である。フォロワーの支持がなければリーダーシップを発揮することはできない。

リーダーにはさらに、周囲への配慮と、フォロワーへの気遣い、優しさ（時には毅然たる態度）が求められる。リーダーは自ら模範的に行動するだけでなく、フォロワーへの気遣いと

信頼、人間的優しさを備えておく必要があろう。

注(4)：cf. シャロン・ダロッツ・パークス『リーダーシップは教えられる』(ハーバード・ケネディスクール講義)（2005)、中瀬英樹 訳、ランダムハウス講談社、2007 年、p.3

注(5)：cf. D・カーネギー『人を動かす』(1936)、山口博 訳、創元社、新装版 1982

10. 次世代育成能力

リーダーは教育者であらねばならない。組織が大きくなるにつれて、各階層でリーダーが必要になるが、それら次世代リーダーを育成するのもリーダーの重要な役割である。有能なリーダーには次世代リーダーを育成する能力が求められる。

この能力は、リーダーが次世代育成を重視するかしないかに左右されると考えられるが、次世代のことを気にかけないリーダーには次世代育成能力がないとは言い切れない。その気になれば次世代を育成する能力が潜在的に備わっている場合もあろう。基本的に、リーダーに求められる他の能力や資質を備えているリーダーなら、次世代育成能力も備えているはずである。

Ⅲ　リーダー育成プログラムの実現に向けて

上記のリーダー像ならびにリーダーに求められる能力と資質は、地域を牽引して行くリーダーのいわば理想像であり、それら全ての能力及び資質がなければ地域リーダーとして認定しないという趣旨のものではない。

教育プログラムの実施にあたっては、想定されるリーダー像を念頭に講義や演習・実習等を配置して頂ければ幸いである。

なお、3 月 11 日の東日本大震災以前と以後とでは、岩手の地域社会を牽引して行くリーダーの位置づけが変わっている。震災後のリーダーには、地域復興の牽引役としての役割が求められており、「地域リーダー育成プログラム」にも、復興を担うリーダーを育成する観点を加味して欲しい。

例えば、危機管理、防災、医療、都市の在り方、地域コミュニティー、ボランティア、組織論などを含む科目の開講や、地域復興に実践的にかかわる活動をプログラムに取り込むなど、復興を担う諸活動を通して、地域の牽引者たるリーダーの育成に取り組んで欲しい。

また、コンソーシアムでの人材育成は、学生が対象になることは当然だとしても、リーダーの育成という観点から、一般社会人向けのプログラムも構想し、一部の科目では在学生と社会人が共に受講・実践できるような工夫をされることが望ましい。

今回の震災は被害地域も被災者数もこれまでの自然災害とは桁外れのもので、今だ避難所生活を余儀なくされている方々も少なくない。まだまだ復旧・復興がその途についたばかりではあるが、このような非常時にこそ地域リーダーが強く求められている。プログラムの受講生は、カリキュラム内容のみならず、非常時において人々がどのように助け合い、どのように振る舞ったのかなど、震災そのものから多くを学び、貴重な教材とされたい。

いわて高等教育コンソーシアムの構成大学には多彩な学部があり、人材も豊富であることから、それらの大学が協力することで、多方面にかかわる復興を牽引する人材の育成は可能だと思われる。そうしたプログラムを実現することで、地域に根ざすリーダーが次々に輩出されることを祈念する。

【付言】

※「地域リーダー」という名称について

今回の検討依頼の内容からは逸脱しますので、以下は蛇足でしかありませんが、話題となった名称について言及しておきます。

- 「地域リーダー」という名称の意味は理解できるものの、ややもすると、《町内会のボス的存在》というイメージが先行する嫌いがある。産学人材育成パートナーシップ（オブザーバー：文部科学省、経済産業省）の経営・管理人材分科会が平成 22 年 4 月に発表した報告書には、「地域経済活性化人材」という用語が使われており、「地域活性化リーダー」というように、名称を具体化する方策も考えられる。
- また、内閣の新成長戦略に基づき、内閣官房長官を議長とする「グローバル人材育成推進会議」から、平成 23 年 6 月 22 日に「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ（案）」が出されており、そこで扱われているグローバル化に対応するための「グローバル人材」と比較すれば、「地域リーダー」という名称は、世界の動きに背を向け地域に固執した内向きの姿勢とも解釈されてしまう。
- 「グローバル人材」と差異化して「グローカルリーダー」という名称もあり得るが、「グローカル」の浸透度がまだ高くないことからすれば、場所の制約を外して、例えば「未来を切り開くリーダー」など、新たな視点で名称を考えることも一案であろう。
- さらに、「地域経済活性化人材」や「グローバル人材」に見られるように、「リーダー」という名称にこだわることなく、「～人材」と簡素化することも検討に値すると思われる。

平成22年6月17日

いわて未来づくり機構
第4作業部会座長　後藤 尚人　様

いわて高等教育コンソーシアム
運営委員会委員長　玉 真之介

地域リーダー像の検討について（依頼）

いわて高等教育コンソーシアムは、岩手に足場を置く高等教育機関の共同事業体として、地域の中核を担う人材育成のための「地域リーダー育成プログラム」開発に取り組むこととしております。

このプログラムの開発にあたり、岩手の地域社会を牽引していくリーダー像と求められる能力や資質等について、各界の有識者の方から幅広く意見を伺う必要があると考えております。

貴作業部会は、産･学･官各界から幅広く委員を結集し、地域力を支える人材育成事業に取り組まれていることから、上記のリーダー像と能力・資質等に関する適切なご提言をいただけるものと確信し、下記のとおり依頼する次第です。

【依頼事項】

＊岩手の地域社会を牽引していくリーダー像と求められる能力や資質等について
（「地域リーダー」という表現にこだわるものではありません。）

【検討期限】

＊平成22年度末日

【検討結果】

＊文書でご報告を願います。（書式の指定はありません）

第１回「地域リーダー像」提言のための勉強会：まとめ

【依頼のポイント】
1. これまでの活動の概略（目的や活動実績）と特に苦労した点は何か
2. 「1.」の活動を振り返り、何を大切にしてきたか、何に注意を払ったか
3. 同じ道を志す若者に対し、助言するとすれば、何を伝えたいか
4. 岩手を元気にするためには、今、何が不足していると感じているか、どんな取り組みが必要と感じているか

日　時　：　平成 22 年度８月２日（月）　15：00～16：10
場　所　：　アイーナキャンパス　学習室５
ゲスト　：　岩渕明　岩手大学理事（地域連携・国際連携担当）・副学長
リーダー像　：　産学官連携リーダー
参加者　：　17 名（いわて高等教育コンソーシアム委員、ゲストスピーカー含む）

【概要】

岩渕明岩手大学理事より、氏が作成された資料「地域リーダー像への提言」に沿って、

1. これまでの活動：
→ 産官学連携を通して行ってきた７つの主要事業から、（1）ネットワークの形成、（2）研究開発人材の養成、（3）広範なものづくり人材の育成、の３点を例示に説明

（1）INS は「新撰組」？　～　岩手大学の印象　*← 人なし、物なし、金なし、自由度あり*
→ 危機感を持った大学と県庁の有志の会：よそ者の眼＆出来ることからすぐ行動へ

（2）金型技術研究センター及び大学院金型・鋳造工学専攻の設置
大学院設置　～　金型・鋳造大学院の目標　～　大学院運営における地域との連携
→ 北上市との協定や経産省の支援により、外から内部を変える。大学院運営は企業も関わり、地域のニーズを反映させた。

（3）岩手マイスター事業　～　地域再生人材創出「21 世紀型ものづくり人材岩手マイスター育成」　*→ ノウハウや現象を分析・考察して論理的方法に活かす総合力*

2. 大切にしてきたこと　*→ 人のために、人のネットワークを重視*

3. 同じ道を志す若者に対し、助言すると
→ 自らのコア（核）を持つこと → それが判断基準となり、自信となる
→ ネットワークの構築と維持 → 賛同する人が集まり、推進力となる

4. 岩手を元気にするために
→ 岩手の特徴・トピックを持つ
→ 経営者の技術に対する嗅覚、意識改革：「もらう」から「取る」へ

についての説明があった。

その後、参加者との意見交換に移り、以下のようなポイントがクローズアップされた。

【意見交換】

＊「よそ者の眼」について

→ よそ者の利点として、地域を客観的に見ることができ、知り合いがいないのでネットワークを作ろうという志向が働く。

→ 同じ地域に住み続けていると、その地域で小さくでき上がってしまう。

→ 地域リーダーには多様な視点や価値感が必要となるため、外に出ることが重要

→ 教育プログラムとしては、地域外へ出る研修や外部との交流を盛り込むことが肝要

＊ネットワークについて

→ 同じ危機感やモチベーションを共有することがネットワーク作りには大切

→ ヒエラルキーは内向きだけれど、ネットワークは外へ外へと広がっていく

→ インターネット上で ICT を活用したネットワーク作りも効果的であるが、バーチャルな結びつきではなく、リアルな人間関係が基本にある。

→ ネットワークで繋がった同志を大切にする。

＊若者の反応について

→ どの時代にも、やる気のある人はいるはずで、まずはそういった人を見出すこと。

＊岩手（地域）へのこだわりについて

→ 特定の地域へのこだわりは特に必要ではない。地域リーダーは、どの地域へ行ってもそこの地域のリーダーとして活動できればいい。

＊リーダーについて

→ 本音で語ることが信頼関係を生む。

【まとめ】

第 1 回の勉強会として、今後のスタイルを確立する上でも貴重な会合となった。リーダーシップに関する文献ではあまり触れられていない「よそ者の眼」や「ネットワーク作り」について貴重なご意見を伺うことができた。

今後、毎月 1 回ペースで、参加者数にこだわることなく、リーダー像（分野）を変えながら実施したい。

第２回「地域リーダー像」提言のための勉強会：まとめ

【依頼のポイント】

1. これまでの活動の概略（目的や活動実績）と特に苦労した点は何か
2. 「1.」の活動を振り返り、何を大切にしてきたか、何に注意を払ったか
3. 同じ道を志す若者に対し、助言するとすれば、何を伝えたいか
4. 岩手を元気にするためには、今、何が不足していると感じているか、どんな取り組みが必要と感じているか

日　時　：　平成 22 年度８月 28 日（土）　14：30～16：00
場　所　：　岩手大学地域連携推進センター会議室
ゲスト　：　中村哲雄　中村牧場・中村家畜診療所所長（前葛巻町長）
リーダー像　：　地方自治体首長
参加者　：　12 名（ゲストスピーカー含む）

【概要】

当日 13 時より第 19 回 INS 夏季講演会が行われ、中村氏が「持続可能なコミュニティーづくり実践学」と題して、葛巻町長時代の取り組みについて講演された。勉強会ではその講演を受けて、準備頂いた資料「逆境が創造の原点 株式会社葛巻町の挑戦」及び「持続可能な地域づくりを目指して～ミルクとワインとクリーンエネルギーの町 葛巻町」は参照程度にとどめ、中村氏自身が受けた教育・人材育成について最初にご説明頂いた。

【人材育成について】

中村氏が葛巻町の職員となって間もない頃、当時の高橋吟太郎町長が、今後は酪農と林業に重点的に取り組むという方針を打ち出し、酪農では社団法人葛巻町畜産開発公社を設立して大規模な公共牧場経営に乗り出した。その際、役場職員の経営ではなく、小岩井農場から専務理事を招聘して、徹底的に民間の経営手法を取り入れると同時に、職員に民間の経営感覚を植え付けた。２代の専務理事に仕えた後、中村氏が３代目の専務理事となり、それらの経験・研鑽を活かして、後に中村氏は葛巻町長に選ばれた。

葛巻町が目指したもう一方の林業では、ワインの製造方法を学ぶため、鈴木重男氏（現葛巻町長）が当時の国立農業試験場へ派遣され、くずまきワインのブランド確立に尽力された。

中村氏も、鈴木氏も、当初から町長になるための帝王学を学んだというわけではなく、牧場経営などの「事業」を成功に導くために尽力し、ノウハウを積み上げたことが、後に自治体のトップとなるべくリーダーになり得たという。

成功のための方程式はないが、夢の実現に向けて、ぶれない熱意と情熱を持ち続けることの重要性を力説された。

その後、参加者との質疑応答に移り、以下のようなポイントがクローズアップされた。

【質疑応答】

＊分かりやすいキーワードで表現するコツについて

→ 上に立つものは全体を把握できないといけない。例えば上位の有段者が初段を相手に戦うとすると、上位の有段者は相手の実力が初段クラスだと見抜くことができるが、初段からは相手が自分より上だとは分かっても、何段の有段者なのかは分からない。このような考えを畜産開発公社時代に学んだ。分かりやすい表現になっているのは、全体が見えてくると、適切なキーワードが浮かぶからではないか。

＊リーダーとして人を動かす際の秘訣について

→ どのような組織に対しても、率直に話ができ自分の考えを理解してくれる人を３人は持ちたい。同時に現場の末端で仕事をしている人の心情を汲むことが重要。上に立つものは 200 人くらいの部下すべてを掌握できないといけない。

＊若い世代への助言は

→ 人のまねをしていてはいけない。

→ 成功の種は現場にあるので、課題を解決するための起業家精神を持って欲しい。

＊リーダーの育成について

→ 当初から持続可能なコミュニティづくりを意識して様々な事業を展開してきたわけではなく、事業を成功させることが結果的に持続可能性に繋がっている。同様に、人材育成についても、初めからリーダー育成というのではなく、個々の「事業」をやり遂げることを課せば、事業遂行のプロセスの中でリーダーシップが身につくのではないか。

＊岩手県全体をみた時に思うことは

→ 人材育成がきちんとなされていない自治体が目につく。第三セクターの統合がなされるのは、それぞれの事業をやり遂げるための内部人材が欠如している場合が多い。次代を担う若い世代には、教育プログラムとして結果を出せるような仕事を与える必要がある。

＊大学への注文

→ 潜在能力のある人が入学できないようなシステムになっていないかどうか検証してほしい。

【まとめ】

地方への交付税交付金が８年間で 50 億円も減額される時期に町長を務められ、その逆境をバネにしつつ、《株式会社》葛巻町を黒字経営にして活性化された手腕に基づく説得力のある講演と勉強会でのお話から、多くの示唆を受けることができた。

資本力ではなく、夢と情熱と実行力があれば地域は活性化できるという指摘に、リーダーのあるべき姿を示して頂いた。

第３回「地域リーダー像」提言のための勉強会：まとめ

【依頼のポイント】
1. これまでの活動の概略（目的や活動実績）と特に苦労した点は何か
2. 「1.」の活動を振り返り、何を大切にしてきたか、何に注意を払ったか
3. 同じ道を志す若者に対し、助言するとすれば、何を伝えたいか
4. 岩手を元気にするためには、今、何が不足していると感じているか、どんな取り組みが必要と感じているか

日　時　：　平成 22 年度９月 30 日（木）　15：00～16：10
場　所　：　アイーナキャンパス　学習室５
ゲスト　：　両川いずみ　　　NPO いわて子育てネット 副理事長・事務局長
リーダー像　：　NPO 主宰
参加者　：　12 名（ゲストスピーカー含む）

【概要】

両川いずみ氏より、氏が作成された資料「幸せの種を蒔く人 ～地域リーダーの育成～」に沿って、上記依頼のポイントごとに以下のような説明があった。

【人材育成について】

1. これまでの活動の概略（目的や活動実績）と特に苦労した点は何か
   ＊テニス選手として活躍されていた時代 ：カルチャー主婦 → 45 歳頃に転機：社会における居場所への意欲 → ケーブルテレビでの番組作りを通して有名人からオーラを受ける → やりたい仕事とのずれを認識 → 女性の自立のための活動、子供向け地域活動などを手がける → NPO 法の制定とともに、岩手での NPO 作りに参画 → H 13 年にいわて NPO フォーラム 21 理事に就任 → H16 年にいわて子育てネット理事就任、H17 年副理事件事務局長となる。
   ＊いわて子育てネットでは、厚生労働省の緊急サポートネットワーク事業をはじめ、多くの委託事業、助成事業、自主事業を展開している。
   ＊これまでの活動はどれも面白かったので、苦労したとは思わない。 ただし、これまでの活動は、自分を支えてくれる人がいたからできた：「支えてくれる人」の必要性
2. 「1.」の活動を振り返り、何を大切にしてきたか、何に注意を払ったか
   ＊テニスでは勝つことでその味を覚えることができた。とことんやってみると完璧ではない自分を知り、かつ信じられる自分をつくることができる → 自分の得意・不得意が分かる。
   ＊自分より優れた人を仲間・スタッフに入れることが重要。
   ＊人にはリーダータイプとリーダを支えるタイプがあり、それらは両輪となって機能する。
3. 同じ道を志す若者に対し、助言するとすれば、何を伝えたいか
   ＊テニスは自分にとっては道場であった。 → どういう人になりたいのか、目の前の目的を自覚し、失敗を恐れずまずやってみることが重要 → やり遂げた時の達成感を大事にする。
   ＊集中力のもとにブレないこと → 安心感を持たせることができる
   ＊自分を支えてくれた人、自分の「運がいいこと」に感謝
4. 岩手を元気にするためには、今、何が不足していると感じているか、どんな取り組みが必要と感じているか
   ＊郷土への愛着、好奇心、人を支える価値観、幸せになろうという意識などが必要
   ＊リーダーは幸せの種を蒔く人、蒔いた種を育てるのはリーダーを支える人

その後、参加者との意見交換に移り、以下のようなポイントがクローズアップされた。

【意見交換】

＊活動を通して男女間の差について感じることは？

→ 女性だからという点や、男社会だと感じることはある。が、まいいやと思っている。

→ 男性社会では、男性は社会に適応するように訓練されている。が、女性はその点ではもう少し自由で、型にはまらない考え方ができる。もっとも、そのためには一人で瞑想することも必要であるが…

＊自分のタイプを見極めることについて

→ いろんなタイプのリーダー像があり、自分の得意な部分を出せばいい

→ 何もないところに何かを作るタイプとか…

→ 10 年経つと風向きが変わる：やりたいことが変化することもある。

→ 自分のタイプを見極め、リーダーになった時にどう振る舞うかというスキルも身につけておくことも重要。

＊幸せについて

→ 幸せになるためには何をしなければならないかを考える → 幸せには一人ではなれない

→ みんなが幸せでなければ自分も幸せになれない。→ 活動すると自分も幸せ、相手も幸せになるという価値観が必要 → 活動が達成された時に幸せ感を知ることができる。

＊リーダーとリーダーを支える仕組み

→ リーダーがリーダとして活動できるためには、リーダーを支える応援団が必要。

→ リーダーも完璧な人間ではない → リーダーにない能力を持つスタッフを集められるかどうかが重要。

【まとめ】

NPO の諸活動を精力的に展開されてきたリーダーである両川氏からは、成功の秘訣のひとつとして、自分を見極めることや、リーダーを支えるスタッフ･応援団を持つことの重要性をご指摘頂いた。自分の「運がいいこと」に感謝されるとのことであったが、運を引き寄せるのは絶え間ない努力の結果であること、自身を支えてくれる応援団が集まるのも偶然ではなく、リーダーとしての吸引力があるからであろう。

第４回「地域リーダー像」提言のための勉強会：まとめ

【依頼のポイント】
1. 岩手県の職員を対象とした人材育成に関する取り組みのご紹介
2. 人事総括課長のお立場から県職員に求める資質等について
3. 職員に対する人材育成プログラムを計画する際に、プログラムごとに目的は異なると思われるが、全てのプログラムに共通する目的はあるのか、ある場合はその目的とは何か
4. 岩手を元気にするためには、今、何が不足していると感じているか、どんな取り組みが必要と感じているか

日　時　：　平成 22 年度 11 月 1 日（月）　15：00～16：20
場　所　：　アイーナキャンパス　学習室５
ゲスト　：　**浅沼康揮**　　岩手県総務部人事統括課長
リーダー像　：　地方自治体・行政職リーダー
参加者　：　12 名（ゲストスピーカー含む）

【概要】

浅沼康揮氏より、 氏が作成された資料「想いを形に 地域を元気に ～県の人材育成と私の想い『すべては光る』～」及び「『人的資源の価値を高める組織のあり方』の提案」（地域振興部・県土整備部 H20.2.19）に沿って、以下のような説明があった。

【県職員の育成等について】

1～2. 岩手県の組織と職員定数、その推移
＊平成 10 年以降職員数は減少している。知事部局では、平成 15 年の 5,000 人規模が、平成 22 年では現員で 4,500 人程になっており、業務の効率化が求められている。

3. 職員育成ビジョン（H21.3）
＊組織のパーフォマンスを向上するため、人材育成研修の再構築、職員の自己実現の支援強化、責任ある行動の促進、成果重視の見直し等を行っている。

4. 職員のモチベーション向上
＊職員の資質やマネジメント能力の危機意識から、「人的資源を高める組織のあり方」の提案を行う。
→ 組織面：人材育成を組織のミッションとし、部下育成の基本スキームを構築
→ モチベーション：職員の自己実現を尊重して能力を伸長させる風土作り、現場主義を徹底して県民の声を肌で感じる機会の増加、昇任基準の明示、業務の視える化

5. これまでの多様な県職員歴

6～8. 想いを形にする
＊現場の視点で：熱い想い → 実際の形にする → 地域が動き → 地域が元気になる
＊前向きにチャレンジ精神で、シンプルに、笑顔を絶やさず、アンテナを高くして、「すべては光る」（← 誰にでも伸ばすことのできる長所がある）が人材育成の基本

その後、参加者との意見交換に移り、以下のようなポイントがクローズアップされた。

【意見交換】

＊県職員の人材育成は、各職場を周りながらジェネラリストを育成しているようだが…
→ 事務系はその傾向があるが、技術系はスペシャリストとしての専門性が高い
→ もっとも、技術系でもジェネラリストになることもあり、両者とも必要であろう
→ ジェネラリストしても、回る職場は概ね 7〜8 ヶ所くらい

＊職員の意欲やマネジメント能力などについて
→ 企画室のような部所であれば、職員は意見を出しやすいであろうが、そうではない部所については、担当の上司が部下の能力を伸ばすように向かわせる必要がある。
→ 上司は部下の個性まで見抜いて全体をマネジメントする

＊県庁の職場の雰囲気は自由に言いたいことが言える場となっているか
→ 職員に話せと言ってもなかなか話してもらえないこともあるので、職員が県民と接する場や機会を作ることで、いろんな意見を聴きかつ自らの意見も持てるようになる。

＊飲み会の機会が減ってきているということは
→ このご時世なので、飲み会の回数は減ってきているようだ。各職場での雰囲気作りは上司によるところも大きい。

＊職員の資質向上についてはどのような研修がなされているか
→ 職位や職種別に多様な研修プログラムを実施している。
→ 専門職用は研修の目的が明確で、事務系・総合職系には、ファシリテーション・スキルやマネジメント・スキルなどの研修も実施している。
→ そのような研修プログラム以外に、パワフルな県民と一緒に仕事をしたりすることで、能力が伸びることが多いように思える。地域に育てて頂くという部分が多い

＊コンソでは地域リーダ育成プログラムを構想しているが、求められる人材像は
→ 地域の人々の熱い思いをサポートできる人材が必要

＊岩手の活性化のために必要なのは
→ 人と人のネットワーク、きづなが重要だと思われる。

【まとめ】

人材育成については、職員のモチベーションを向上させるための組織作りに取り組まれ、組織のミッションとして、役職に応じた役割の明確化、部下育成方針の設定、評価制度の見直しなど、人的資源の価値を高める組織作りのプロセスが理解できた。

加えて、県民と接することで刺激を受けて成長することの重要性や、後進の指導にあたっては、「すべては光る」（詩作:坂村真民）に込められた部下に対する思いやりと上司の心得を示して頂いた。

第５回「地域リーダー像」提言のための勉強会：まとめ

【依頼のポイント】

1. これまでの活動の概略（目的や活動実績）と特に苦労した点は何か
2. 「1.」の活動を振り返り、何を大切にしてきたか、何に注意を払ったか
3. 同じ道を志す若者に対し、助言するとすれば、何を伝えたいか
4. 岩手を元気にするためには、今、何が不足していると感じているか、どんな取り組みが必要と感じているか

日　時　：　平成 22 年度 12 月 13 日（月）　15：00～16：30
場　所　：　アイーナキャンパス　学習室５
ゲスト　：　村井良隆　あさ開代表取締役社長
リーダー像　：　企業経営者
参加者　：　８名（ゲストスピーカー含む）

【概要】

村井良隆氏より、氏が作成された資料「伝統と革新」に沿って、以下のような説明があった。

1. 社長になる経緯について
   ＊村井家のルーツは 370 年ほど前の近江商人に遡る。明治４年（1871 年）に、７代目が新しい時代の幕開けに「あさ開」という名で酒屋を始め、良隆氏で５代目となる。
   ＊ 1995 年に 37 歳で社長となり、当時の年商は 17～18 億円、２年目で 20 億となる。
2. 日本酒の現状
   ＊ここ 30 年で日本酒の消費量は３分の１になっており、社長就任３年目から業績は悪化した。当初はこんな時代（市場が半減した頃）に… と悩んだが、京セラの稲盛和夫氏が主宰する「盛和塾」に参加し、稲盛氏から教えを受け、奮起する。
   ＊日本酒の市場調査を実施する。
3. 日本経営品質賞との出会い
   ＊日本経営品質賞（JQA：Japan Quality Award）について勉強を始めた頃、あなたの会社は盛岡に必要ですか」と問われ、地域にとって必要な会社になることの必要性を実感する。（後に、岩手県経営品質協議会を設立する。）
4. 私たちのお客様は誰？？？
   ＊社員全員で討論し、それまで、卸業者や酒屋を相手に商売をしていたが、実際にお酒を飲んでくれる人が「客」であるとさとる。
   ＊新しいビジネスモデルの確立
   → 酒という商品を、「もの」から「こと」で捉え、「すべてのお客様の食の場における『喜び』『楽しみ』『くつろぎ』に貢献いたします」という経営理念を確立した。
5. 企業 30 年説：創造的破壊
   ＊ 15 年前から海外マーケットの開拓に着手し、ニューヨークでの市場を確保している。
   ＊新酒の販売時期なども考慮し、四季に応じた酒を造り、市場を開拓する。
   ＊顧客に ICE (Infomation, Communication, Education) 活動をして、３万人が年間５万円買ってくれれば、年商 15 億円で経営が成り立つ。
   ＊岩手県産の米でお酒を造り、県外、海外で販売し、地域へ還元する：あさ開の地域貢献

その後、参加者との意見交換に移り、以下のようなポイントがクローズアップされた。

【意見交換】

＊若くして社長となられ、社員との一体感はどのようにして作られたのか…

→ 社長は、社員と密にかかわることが基本。

→ 社員の評価制度をどうするかは重要で、成果主義を取り入れたら有能な社員ほど目的設定が高邁でうまく行かない。みんなが納得できるような評価はできないので、社員の評価はしないことにした。

→ 社員は全員同じ重みで、全員一丸となって目標を持つ方がいい。 → 全員評価主義

→ ただし、仕事を掛け持っている社員にはそれなりの報酬を出している。

＊経営者一家に生れたことで、受けた影響とかは？

→ 後を継ぐのはいやだった。が、大学には行けということで、東京農大に入った。当時、酒造学科には、200 人中 50 人くらいは後継者が潜り込んでいた。彼らが持ってくる酒を飲み比べることで、この業界を認めるようになった。

→ 自分のリーダー像は、おじいさん達の姿かもしれない。

＊社長になった時に、会長（父親）は会社にあまり出てこない？

→ いっさい来なかった。会社を受け継いだ時には、自分より年上の社員もいたが…

→ 会長は来ないので、稲盛氏の理念（社員の物心両面の幸せを追求する）を実践してきた。

→ その意味では、稲盛氏が自分のリーダー像になっている。

→ 社長になった後は会長からは何も指導を受けていないが、社長になるまでは、毎年のように職場・職種を変われという辞令を受けたので、仕事の全体像が分かるようになった。

＊ステラモンテなど直営レストランも経営されているが…

→ 社長になった頃は 20 億円の売り上げがあったものの、粗利が 32％くらいで 68％が原価だった。それが今では、自前のレストランや、お酒の直売所等を持つことで、売り上げは 14 億円くらいだが、粗利が 46％くらいまでにあがっているので、利益は 6〜7 億ということで、以前と変わらない。このように、効率良く経営することができている。

＊グローバル化時代の世の中で、日本酒は白ワインに対抗できそうだけれど…

→ アメリカで 10 年間は暴れてみようと考え、12 の酒造会社が参加し、各社 500 万円の出費で計 6000 万を資本に活動を始めた。スタート 8 年目で事業は黒字になった。その秘訣は、現場で顧客に日本酒についてきちんと説明することだと思う。

→ 現在 12 社中、7 社がアメリカでの販売を続けている。

＊これからの岩手に必要なのは？

→ 第 1 次産業を変える必要がある。消費者教育をもっとやって、岩手のいいものを買うようにならなければ…

→ 今後は世界的に食料や水が不足する時代がやって来る。その時、第 1 次産業は岩手にとって重要な戦略となり得る。

【まとめ】

若くして社長となられ、これまで企業・業界を牽引してこられたバイタリティに満ちたお話を伺うことができた。実践に裏打ちされた話し方には、迫力がある。先代から会社を引き継ぎ、それをさらに発展させねばという重圧を跳ね返す力は、ただの跡取りからは生れない。

高校生を対象とした自己実現支援プログラム
「復興とともに歩む私たちの未来」　実施要項

本プログラムは、被災地の復興を支え、推進する人材の育成を目的に、被災地の高校生を対象に、起業支援を行っている団体による講演、被災地の中小企業経営者や自治体職員等との懇談等により、地域と自分の将来について考える機会を提供することでプログラム参加者の将来への不安を軽減して、早期に目標を定めることができるように支援するもので、加えて雇用のミスマッチ等の軽減を意図している。
また、被災地で活躍する経営者や自治体職員等と地域の復興をテーマに意見を交わすことで、地域への愛着を深め、復興を支える若手人材を育成することを目的とする。

実施期間
平成２４年８月２８日（火）～平成２５年３月３１日（日）

実施対象
岩手県立山田高等学校２年生（７６名）

実施内容
起業支援を行うＮＰＯ法人代表理事による講演
山田町及び周辺市町村の企業経営者、自治体職員、医療関係者等とのグループワーク
文化祭での展示・発表及び個人レポート作成

実施スケジュール
第１回　８月２８日（火）１３：４５～
特定非営利活動法人 edge　代表理事　田村太郎　氏による講演・質疑応答（100分）
講師：特定非営利法人 edge 代表理事　田村太郎　氏
第２回　９月　５日（水）１３：４５～
山田町及び周辺市町村の企業経営者等の講演及びグループワーク１回目（100分）
講師：株式会社うちむら家具　代表取締役社長　内村　健太朗　氏
特定非営利活動法人いわて連携復興センター　事務局長　葛巻　徹　氏
岩手県沿岸広域振興局産業振興課　主査　佐々木　毅　氏
岩手県沿岸広域振興局産業振興課　主査　北栃　玲子　氏
岩手県沿岸広域振興局産業振興課　主任　阿部　芳肇（みちとし）　氏
第３回　９月１９日（水）１３：４５～
山田町及び周辺市町村の企業経営者等の講演及びグループワーク２回目（100分）
講師：株式会社千田精密工業　取締役　千田　ゆきえ　氏
岩手県立宮古高等看護学院　副学院長　富谷　千秋　氏
株式会社川石水産　代表取締役社長　川石　睦　氏
岩手アカモク生産協同組合　代表理事組合長　高橋　清隆　氏
三陸味処三五十　大杉　繁雄　氏

第４回　　９月２６日（水）１３：４５～
山田町及び周辺市町村の企業経営者等の講演及びグループワーク３回目（100 分）
講師：アグリ管理士（花卉・野菜農家）　佐々木　孝之　氏
株式会社エフビー　代表取締役会長　田鎖　巖　氏
復興庁岩手復興局　参事官補佐　渡部　剛士　氏
復興庁岩手復興局　参事官補佐　菊池　信太郎　氏
漁業者（カキ、ホタテ養殖）　上林　實　氏
漁業者（カキ、ホタテ養殖）　白野　貴　氏

第５回　１０月１０日（水）１３：４５～
文化祭での展示発表に向けたまとめ方指導（100 分）
講師：特定非営利法人 edge 代表理事　田村太郎　氏

第６回　１０月１２日（金）、１３日（土）
文化祭での展示発表

第７回　１０月２２日（月）１４：４５～
山田町の復興計画について（50 分）
講師：山田町復興推進課

第８回　１１月　７日（水）１４：４５～
山田町の医療体制について（50 分）
講師：山田町健康福祉課

第９回　１２月１１日（火）１３：４５～
個人レポート作成指導１回目（100 分）
講師：特定非営利法人 edge 代表理事　田村太郎　氏

第１０回　１２月１８日（火）１３：４５～
個人レポート作成指導２回目（100 分）
講師：信幸プロテック株式会社代表取締役社長　村松幸雄　氏

１月～３月　　個人レポート提出・レポート文集作成

主催

岩手県立山田高等学校、いわて未来づくり機構、岩手大学釜石サテライト

共催

特定非営利法人 edge、岩手県中小企業家同友会

問い合わせ先

岩手県立山田高等学校　副校長　瀬川ひとみ
tel:0193-82-2164　　fax:0193-81-2055
いわて未来づくり機構「地域力を支える人材育成」作業部会事務局
岩手大学研究交流部研究協力課　八重樫喜陽
tel:019-621-6851　　fax:019-621-6995

NHK岩手県のニュース　盛岡放送局

高校で復興担う人材育成講座



津波で大きな被害を受けた山田町で、高校生を対象に今後の復興を担う人材を育成する講座が開かれました。
この講座は、県内の産官学のメンバーでつくる「いわて未来づくり機構」が、今後の復興を担う若い世代の人材を育てようと８月から山田町の県立山田高校をモデル校に開いているものです。
５日は、生徒７０人あまりが参加し、復興支援にたずさわったＮＰＯの関係者などが講演し、この中で、盛岡市に本社のある家具店の社長は、被災した宮古市の店舗を使って支援物資の提供を行ったエピソードなどを紹介しました。
その後、生徒たちは、グループ討論を行い、「復興を外部の力に依存している状況で、もっと地域住民が動かなければならない」とか、「卒業後に就く仕事と地域の復興とを関連づけていきたい」といった意見を発表しました。
講座に参加した２年生の赤瀬満輝さんは、「少しずつ復興しているが、まだ不便なところがあり、今後、自分たちでできることをやっていきたい」と話していました。「いわて未来づくり機構」に携わっている岩手大学の後藤尚人教授は、「生徒には、山田町の可能性を見つけ、復興を支えることができる人材になってほしい」と話していました。
生徒は、今後も講座を受け、来年の春までに町の復興について自分たちで考えたプランをとりまとめることにしています。

09月06日　09時01分

別紙12：自己実現支援プログラム レポート集 表紙

復興とともに歩む 私たちの 未来

高校生を対象とした自己実現支援プログラム



岩手県立山田高等学校２学年

議案第１号

平成２４年度　事業実績報告(案)

「いわて未来づくり機構」の設立５年度目である平成 24 年度においては、機構の第２フェーズ（H24～H26）のスタートの年と位置付け、オール岩手による復興と未来づくりに取り組んでいくこととし、部会活動をはじめとした各種活動を展開した。

事　業　内　容

(1) 総会の開催

開催日：平成 24 年７月 13 日（金）
場　所：ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング
内　容：ア　平成 23 年度事業報告(案)／平成 24 年度事業計画(案)
　　　　イ　「いわての復興と未来づくりに向けた共同宣言」採択
　　　　ウ　講演「震災復興と未来づくり～阿部千一に見る震災復興～」
　　　　　　講師　梅原　愛雄氏
参加者：約 120 名

(2) ラウンドテーブルの開催

①　第１回ラウンドテーブル

開催日：平成 24 年７月 13 日（金）
場　所：ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング
内　容：機構の活動方針等に係る意見交換等
参加者：約９０名

②　第２回ラウンドテーブル

開催日：平成 25 年２月９日（土）
場　所：岩手県立大学宮古短期大学部
内　容：ア　部会報告
　　　　イ　東北未来創造イニシアティブの取組に係る意見交換等
参加者：約５０名
その他：ラウンドテーブル終了後、東北未来創造イニシアティブの推進について記者発表を実施

(3) 復興フォーラムの開催（岩手県と共催）

開催日：平成 25 年２月９日（土）　※ラウンドテーブル後に開催
場　所：岩手県立大学宮古短期大学部
内　容：ア　講演「人を助けるすんごい仕組み」
　　　　　　講師　西條　剛央氏

　　　　イ　パネルディスカッション「復興３年目に向けて」
　　　　ウ　復興分野別情報交換会

参加者：約 200 名

(4)　企画委員会の開催

活動の企画・調整を担う組織として、平成 23 年度に設置した。平成 24 年度にあっては、委員会を４回開催した。

(5)　作業部会の開催

震災により設置が１年延期されていた観光作業部会が活動を開始し、全５部会が、復興を中心テーマとして活動を行った。なお、第４作業部会については、当初の予定通り、設置から５年が経過した平成 24 年度をもって活動を終了した。

部会名(担当機関)	平成 24 年度の主な活動実績
第２作業部会 (岩手大学)	・部会関係組織の実施する復興支援活動等のＨＰ掲載 ・被災企業見学及び意見交換 ・部会関係組織の復興関係の取組に係る情報共有
第４作業部会 (岩手大学)	・久慈市において地域リーダー像を市民とともに考えるイベント「Kuji café 2012」を実施 ・人材育成データベースを継続運用 ・県立山田高校において「高校生を対象とした自己実現プログラム」を実施
第５作業部会 (岩手県立大学)	・釜石市鵜住居仮設住宅団地において「見守りを核とするＩＣＴを活用した生活支援型コミュニティづくり」プロジェクトを実施 ・県立大学公開講座「医療・福祉の情報連携とコミュニティづくり」を共催
公募型復興企画推進作業部会 (岩手県立大学)	・いわて復興支援ポータルサイト「いわて三陸 復興のかけ橋」を中心としたマッチングを実施（企画提案型 11 件提案、８件受入。ニーズ型 127 件要請・提案、113 件受入） ・ワークショップを２回開催（大槌町、宮古市）
観光作業部会 (岩手県商工会議所連合会)	・「コンベンション誘致による復興支援」「ポストＤＣを見据えた観光振興」「県北観光の振興」等に係る意見交換 ・講演会「観光立国の推進について」を開催

議案第２号

平成25年度いわて未来づくり機構活動方針（案）

Ⅰ　活動方針

１　平成25年度は、機構の第２フェーズ（概ねH24～H26）の中間年であり、復興を加速する年でもあることから、機構としての復興に関する取組をさらに充実させるとともに、成果と実績をあげることに重点を置いて取り組む。

２　機構の活動内容の周知を図り事業の実効性を高めるため、引き続き積極的な情報発信を行う。

Ⅱ　活動計画

１　機構及び各会員が取り組む県民運動(平成24年７月の共同宣言に基づいた取組)

(1)　震災復興に向けた活動の推進

県民総参加による復興への動きを推進し、復興を加速させていく。

①　復興支援ポータルサイト「**いわて三陸 復興のかけ橋**」を中心とした情報発信・マッチングの促進・連携体制の構築

②　経済同友会などと共に、人づくり・街づくり・産業づくりに取り組む「**東北未来創造イニシアティブ**」の推進

③　**復興教育**をテーマとした新部会の創設と実効性のある取組の推進

(2)　いわての復興の象徴であり希望あふれる未来の実現に向けた活動の推進

復興の象徴となる取組を後押しすることで、復興とその先の希望あふれる未来の実現を図る。

①　**国際リニアコライダー**（ＩＬＣ）の東北誘致に向けた県民意識の盛り上げ、国内候補地決定後の研究施設とその周辺環境の整備など、受入体制の充実

②　**2016 希望郷いわて国体**の開催に向けた県民意識の盛り上げ、募金活動・協賛活動への協力や関連イベント等への積極的な参加

③　**いわて三陸ジオパーク**認定に向けた県民意識の醸成、ジオパークに関する周知啓発や三陸復興国立公園の指定と連動した復興・地域おこしの取組

２　具体の課題解決のための各部会の活動

各作業部会は、いわての復興と未来づくりに向け、緊急かつ重要な課題に対応するための目に見える活動を行い、**具体の成果を出していくことを強く意識**して当該成果をラウンドテーブル、会員及び県民にフィードバックする。

部会名【担当機関】	平成25年度の主な活動計画・目標等
東北未来創造イニシアティブ作業部会 【岩手銀行】	・人材育成道場の開設及び円滑な運営
産業復興作業部会 【岩手大学】	・H24策定のアクションプランの推進 ・沿岸地域の企業訪問を行い、支援内容に関し要望調査を実施 ・コーディネータの連携体制の構築
医療福祉体制作業部会 【岩手県立大学】	・研究会の開催(月１～２回) ・講演会・研修会の開催 ・仮設住宅及び復興公営住宅等の孤立死、自殺の防止に係る取組体制の構築
かけ橋作業部会 【岩手県】	・マッチングの促進 ・復興関連情報の発信 ・復興支援ネットワークの強化
観光作業部会 【岩手県商工会議所連合会】	・ILC誘致の実現 ・花巻空港の台湾定期便就航の実現 ・「あまちゃん」を利用した観光の推進
（仮称）復興教育作業部会	・「いわての復興教育プログラム」の推進を支援

３　積極的な情報発信

機構の活動を積極的に発信することで、活動のより効果的な展開を図る。

①　会員団体の総会等を利用した団体構成員等に対する機構の取組内容の周知
②　機構だよりの充実（年４回の発行)、電子メール等を利用した会員向け情報提供（随時）の強化
③　機構ＨＰ（岩手のイイモノ紹介など概ね隔月更新）による、一般向けの情報発信の強化
④　会員、構成団体ＨＰとの相互リンク等による、露出の拡大

Ⅲ　スケジュール

主なスケジュール	概要（案）
〇第１回ラウンドテーブル 日時：6/24(月)14：30～15：30 会場：ホテルメトロポリタンＮＷ 司会：(岩大)岩渕副学長	・25 年度の活動方針についての協議 ・新部会(復興教育)の設置についての協議 ・東北未来創造イニシアティブの進捗状況報告
〇総会・交流会 日時：(総会)6/24(月)15：40～17：00 (交流会)　　17：15～19：00 会場：ホテルメトロポリタンＮＷ	・24 年度実績報告、25 年度事業計画の審議 ・ILC 誘致に係る経過報告、機構としての決議 ・講演
〇第２回ラウンドテーブル 日時：10 月下旬 会場：岩手大学(仮) 司会：(県)中村部長	・具体の課題(国体・ＩＬＣ・ジオパーク・ものづくりビジョンなど)に対するディスカッション ・活動内容の確認、修整、追加等
〇第３回ラウンドテーブル 日時：１月下旬 会場：岩手銀行(仮) 司会：(岩銀)斎藤専務	・活動内容の確認、総括 ・次年度の活動に向けた提言

国際リニアコライダー（ＩＬＣ）の東北誘致を求める決議（案）

国際リニアコライダー（ＩＬＣ）計画は、質量の起源とされるヒッグス粒子の詳細な性質解明など、宇宙誕生の謎を探求しようとする、世界最高・最先端のビッグプロジェクトである。

ＩＬＣの立地により、その地域には世界各国から第一線の優秀な人材と技術が集う「国際学術研究都市」が形成されることが考えられる。

これは、震災から立ち上がろうとするいわてにとって、単に震災前の状態に戻すのではなく、より豊かな地域社会を実現していくための、大きな夢となり確かな希望となるものである。

東北の北上山地には、震災の影響を全く受けることのなかった50Km にも亘る強固な花崗岩帯が存在し、地質調査においても活断層がないことが判明している。まさにＩＬＣの適地である。

私たちは、復興の象徴となるＩＬＣ東北誘致と、復興の先の希望あふれる未来の実現に向けた取組を、産学官、共に手を携え、進めていく。

いわて未来づくり機構は、オール岩手の力を結集し、総力を挙げてＩＬＣ計画の実現に取り組んでいくことをここに宣言するとともに、北上山地が科学的技術的評価により国内候補地として選定されたあかつきには、国家プロジェクトとして、東北へのＩＬＣ誘致が強力に推進されることを、強く要望する。

上記のとおり決議する。

平成 25 年 6 月 24 日

いわて未来づくり機構